

浦添貝塚 —第一・二次発掘調査のまとめ—

新田重清¹⁾・比嘉賀盛²⁾・島袋春美³⁾・仲座久宜⁴⁾

Report on the Excavation of Urasoe Shell Mound

Jyusei NITTA¹⁾, Yoshimori HIGA²⁾, Harumi SHIMABUKURO³⁾ and Hisayoshi NAKAZA⁴⁾

はじめに

浦添貝塚出土資料は、1972（昭和47）～1977（昭和52）年まで、沖縄県立博物館の考古担当学芸員として在籍していた新田重清が、前任地の浦添高等学校において教鞭を執る傍ら、同校の郷土史研究クラブ活動の一環として得た調査資料のひとつである。本資料は、新田が博物館に赴任して以来、今日まで当館の地下収蔵庫に学芸資料として保管され、一部資料については常設展示されてきた。

その他、当クラブの活動により得られた資料には、浦添城跡をはじめ浦添市内の数遺跡で採集された資料のほか、知念村クルク原遺跡の資料がある。これらの資料は、1972（昭和47）年の本土復帰前に得られた貴重なもので、中にはその後の開発等により壊滅し、現在では確認が困難な仲西貝塚・沢戸遺跡等の資料や、浦添貝塚のように遺跡が史跡指定・現地保存の理由となった資料も含まれる。

県立博物館では、当クラブの活動及び調査資料の重要性を鑑み、何らかの形で順次報告を進めていく計画にしており、はじめに浦添貝塚調査資料について整理・報告を行うことになった。

なお、この浦添貝塚の調査成果については、かつて同クラブが発行した機関誌『うらおそい』において、考古班の部員により概要がまとめられたほか（喜屋武ほか1970）、続いて新田により各種学会誌において、調査概要とともに市来式土器出土の意義についても論ぜられた（新田1970・1971）。しかし、これらの報告は時間及び紙幅の制約により、代表的

資料の報告にとどまっていた。

今報告はこれらの論考を基礎として、当時の日誌・メモ類の情報をも付加して構成されるが、その前提として、調査から35年あまりが経過し、その間に県内で実施された発掘調査・研究及び新たな分析法により多くの情報を得ることが可能になったことで、現時点での視点・解釈から再度整理・報告を行う目的で作業を進めた。なお、編集作業は2005（平成17）年2月から、当時の関係者で構成される「うらおそい会」により数回にわたる会合を設け、編集を行ってきたものである。

出土資料の中でも人工遺物については、各執筆担当者により再度実測・撮影・集計が行われ、出土資料の大半を占める貝類については、収蔵資料整理作業の一環として、考古資料整理作業員により分類・計測・集計が行われた。

なお、本資料は調査から35年あまりが経過していることから、資料収納袋が劣化により破損し、一部の資料が他のコンテナに散逸した状態であったが、今回新たに袋詰めがされ、散逸資料に関しても捜索後は注記・種別ごとに収納を行った。これらの資料は今後、展示会や研究資料として内外に公開し、活用していく予定である。

本稿をまとめるにあたり、潮平寛一、津波吉聰、宮城朝光、宜保久技の各氏より資料の提供及び助言を得た。資料整理作業にあたっては、石器の石質同定は大城逸朗氏に、人骨の同定・分析は土肥直美氏に依頼した。また、貝類遺体の分類、計測、集計及

1～4) 沖縄考古学会

Okinawa Archaeological Society

4) 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

び袋詰め作業は、友利映子、徳村笑里子の両氏に協力していただいた。記して感謝申し上げたい。

調査に至る経緯・経過

浦添貝塚は1959（昭和34）年11月8日に、当時興南高校の教員であった嵩元政秀により発見された遺跡で、翌1960（昭和35）年には、多和田真淳により琉球政府文化財要覧の中で紹介されている（多和田1960）。

その後、浦添貝塚は琉球政府立浦添高等学校の郷土史研究クラブにより、1969（昭和44）年5月3日に表面踏査が実施され、土器や貝製品が採取された。また、その際に遺跡の一部が自然崩壊の危機に瀕していることが確認されたため、同クラブは琉球政府文化財保護委員会の許可を得て、同年8月10日～14日の日程で、浦添高校を宿舎とした合宿形式による試掘調査を実施した（図版14～17）。

その際、発掘道具などの機材はクラブ顧問である新田の自家用車に積み込んで運搬したが、部員である学生は片道約3kmの調査地までの道のりを徒歩で往復していた。

第一次調査は、北西から南東に連なる崖の下端に沿い、1m四方のグリッド合計4ヶ所について発掘を実施した（第2図）。その結果、貝塚の基本層位が把握されるとともに、数種の有文土器や貝・骨製品等の出土遺物を得ることができた。この成果は、同クラブ機關誌『うらおそい』創刊号（喜屋武ほか1970）において、仲西貝塚、浦添城跡の調査成果とともに報告が行われたほか、『南島考古』創刊号にも掲載された（新田1970）。しかし、調査は5日間と短期間であったことから、遺跡の性格を把握するに至らず、翌年に第二次調査を実施することとした。

第二次調査は、1970（昭和45）年7月21日～27日の日程で実施した。今回の調査実習は伊祖公民館を宿舎として合宿を行った（図版18～21）。

調査地点は第一次調査時の地点を基準として、その南東側に第0ピット、北西側に第3～5ピットを設定し、15cmごとの深度で掘り下げを行った。その結果、主体となる土器は第一次調査と同様な構成を見たが、第4ピット第II層下部より、南九州を中心に分布する市来式土器が出土した。この発見は、沖縄初の九州との文化的交流を実証する資料として、

調査直後に新聞報道も行われ注目された（沖縄タイムス社・琉球新報社1970）。また、この成果は市来式土器を中心に『古代文化』にて概要が報告された（新田1971）。この市来式土器の出土により、沖縄土器編年の位置付けが明確さを増し、その作業は加速度的に進展することとなった。

浦添貝塚の保存に至る経過

ちょうどこの時期、沖縄では日本復帰に先行した各種開発が盛んに行われ、多くの遺跡が壊滅の危機にさらされていた。浦添貝塚についても、立地する丘陵全体が削平され、現国道330号線浦添バイパスが建設される計画が浮上していた。

この事態を憂慮した沖縄考古学会では、理事会において貝塚の保存を要請していくことを採択し、保存に向けた運動を展開していった。はじめに、友寄英一郎会長及び新田らが琉球政府文教局、文化財保護委員会、建設局、立法院事務局、立法院文教厚生委員会に赴き、浦添貝塚出土の市来式土器が、九州との交流を物語る貴重な資料であること、さらにこの土器から遺跡の年代が判明したこと、浦添貝塚が研究史的意義を持つ重要な標式遺跡であることを説明した上で、保存要請を行った。

また、貝塚上部の高御墓関係者とも連携し、墓とともに保存要請を行うことを確認しあい、マスコミも新聞紙上をとおしてこの保存運動を支援した。

このような保存運動の高まりの中で、琉球政府文化財保護委員会も浦添貝塚の重要性を考慮し、高御墓とともに琉球政府建設局に現状保存を要請した。

またその一方で、沖縄考古学研究連合会は、貝塚が所在する浦添市伊祖において展示会を催し、付近住民にもその重要性を訴えた。

その後、文化財保護委員会と建設局双方で幾度となく調整が行われ、最終的に工事は当初の計画を大幅に変更することで決着し、遺跡はトンネル工法により保存されることとなった。この設計変更により、総額117万ドルの経費が増設され、235日の工期が延長されることとなった（新田1973a）。

この一件により、浦添貝塚の重要性はさらに注目されるようになり、1972（昭和47）年2月25日には、浦添貝塚が琉球政府指定史跡に、高御墓が特別重要文化財に指定され、同年5月15日の日本復帰に伴い、

それが沖縄県指定史跡及び有形文化財（建造物）として引き続き保護されることとなる。

なお、現在は国道330号線伊祖トンネル上に位置する浦添貝塚を中心に、周辺の広大な敷地が浦添大公園として自然を活かした形で整備され、地域の憩いの場として親しまれている。

調査体制

浦添貝塚の発掘調査は、琉球政府文化財保護委員会の許可により、浦添高校郷土史研究クラブの調査実習を兼ねて二次にわたって行われた。その体制は次のとおりである（氏名は当時のもの）。

第一次調査

期間：1969（昭和44）年8月10日～14日

顧問：新田重清

発掘調査員：〔1年生〕仲嶺盛彦、照屋正賢、
宮城朝光、高里幸、比嘉春美、与座清子、
知念久枝 比嘉サヨ子
〔3年生〕喜屋武元伸、津波古聰、潮平寛一、
照屋治美、豊里英美、金城佳代子

第二次調査

期間：1970（昭和45）年7月21日～27日

顧問：新田重清

発掘調査員：〔1年生〕栗森菊枝、大嶺政子、
比嘉美似子、識名久美子、砂辺節子、
棚原正助
〔2年生〕仲嶺盛彦、古波藏一成、高里幸、
照屋正賢、宮城朝光、比嘉賀盛、比嘉春美、
与座清子、知念久枝、比嘉サヨ子
〔卒業生〕喜屋武元伸、津波古聰、潮平寛一

なお、本稿は浦添高校郷土史研究クラブの元メンバーで構成された「うらおそい会」の新田重清、比嘉賀盛、島袋春美に、県立博物館考古担当学芸員の仲座久宜が加わり、共同で検討し、執筆・編集作業を行った。

位置と環境

浦添貝塚は、浦添市伊祖字真久原に広がる、浦添丘陵と称される石灰岩丘陵の東側斜面、標高約70m

に位置する遺跡である（第1図）。その東側裾野には牧港川が流れ、約2km北側に位置する牧港の海岸へ注ぎ込んでいる。

貝塚が広がる中央付近には、丘陵の基盤を成す琉球石灰岩が露出しており、その岩陰には県の有形文化財として指定されている伊祖の高御墓が築造されている。浦添貝塚はその崖下傾斜地に形成されている。調査はこの断崖に接する堆積土について行われた。

浦添貝塚が立地する浦添丘陵の周辺には、かつては琉球石灰岩土壤に一般的な植生が分布し、東側に牧港川が流れ、その堆積土で構成される沖積地に接するように海岸が広がっていた。浦添貝塚人たちはこのような環境の中で狩猟採集を行い、生業を営んでいたことが、出土する遺物から想定できる。

なお、貝塚上部に位置する高御墓の前庭部からは、貝塚と同様な土器片が採取されていることから、その一帯には貝塚を形成した人々が生活していた居住域が存在する可能性がある。

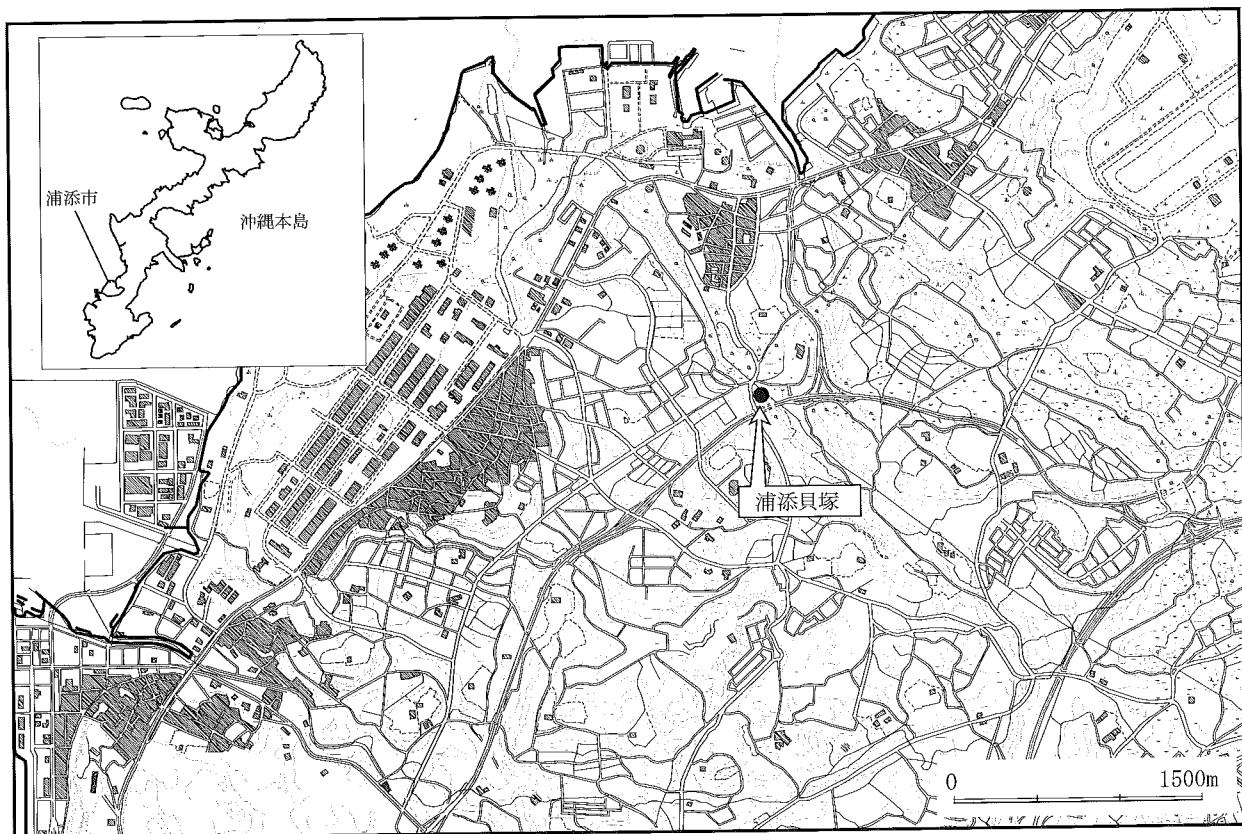
また、貝塚の周辺には、浦添グスクや浦添ようどれ、伊祖グスク、伊祖古島、真久原遺跡等のグスク時代に相当する遺跡や、近現代の古墓群が多く見られる。当地にこのようなグスク期の遺跡が分布するのは、中・南部のほぼ中間に位置するという地理的要因に加え、内外の貿易の中核として機能していたとされる牧港港の存在が起因していると考えられる。このように浦添貝塚周辺は、長きにわたって人々の暮らしが営まれていたことが、遺跡の分布から読み取ることができる。

層序

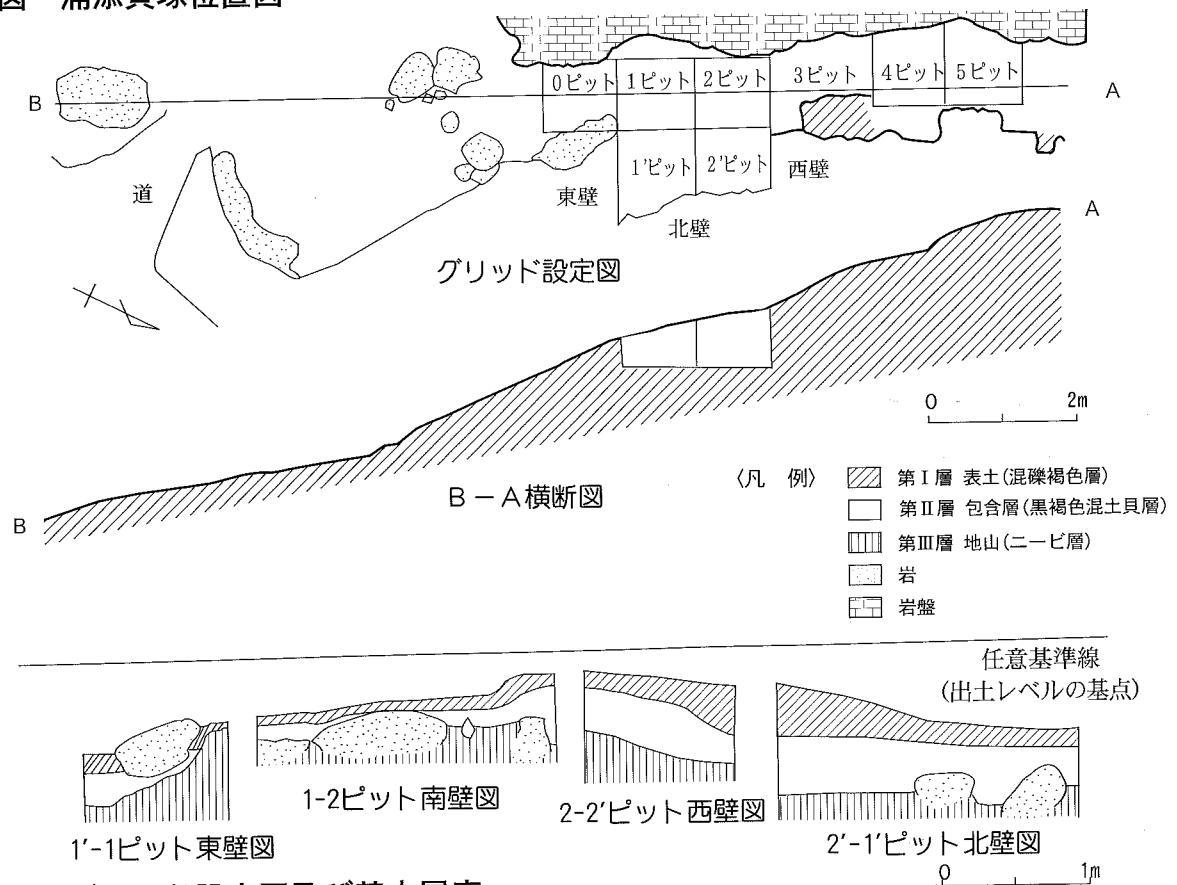
層序は大きく3枚に分層することができるが、調査地は北東から南西にかけて傾斜しているため、層厚は均一でなく、総じて北東側に厚くなる傾向を示している（第2図）。

第I層は表土で、層厚は20～70cmを測る。礫を含む褐色の土層で、第II層と同様な遺物を含む。第II層は遺物包含層で黒褐色を呈す。層厚は40～60cmを測る。第III層は地山で、第三期砂岩質の細粒子の黄褐色砂層である。

なお、各層において琉球石灰岩の礫や岩の混在が確認されているが、これは当該地が崖下にあるこ



第1図 浦添貝塚位置図



第2図 グリッド設定図及び基本層序

とにより、崖上からの崩落等により混入したものと思われる（図版16）。

出土遺物は第Ⅰ層、第Ⅱ層ともに見られ、双方で出土遺物の時期、種別の相違は認められなかった。このことからも、貝塚堆積土は当時の崖上からの投棄に加え、その後の高御墓構築時、または自然崩落による二次堆積により形成されたものである可能性が高い。

出土遺物

ここに掲げた資料は、これまでの概要報告（新田1970・1971）に記載された資料を基に報告を行うが、その他資料についても、今回の整理作業時に報告の必要があると思われた資料については、図化及び写真撮影を行い掲載する。

また、既報告資料の中には、今回の整理作業中において所在が確認できないものが存在するが、これらの資料については、既報告文献に掲載されている写真から分析・検討し、一部資料は写真から図化を試み報告を行う。

なお、ここでは、本報告掲載資料と既報告資料との共通性を保持する目的から、対照する事項を土器については第1表として対照一覧を示し、その他製品は一覧表中に明記した。

土器（第3～7図、図版1～4）

この浦添貝塚の発掘以降、沖縄の土器編年研究は大きく進展した。ここでは今日までの研究の成果を踏まえ、浦添貝塚から出土・採集された土器を再検討してみた。

土器は小片が大半を占めることから、詳細な分類は困難であるが、少なくとも面縄前庭式土器群、仲泊式土器群、宇宙下層式土器群の3群に大別することが可能である。次に、それぞれの特徴を記す。

1) 面縄前庭式土器群（第3・7図、図版1・2）

ここでは凸帯と沈線の組み合わせによる、面縄前庭式土器及びこれに類似する凸帯文土器を一群としてまとめ、合計25点がこの一群に属することを確認した。

第3図1・2は、その右図に示すとおり接合が可能である。嘉徳遺跡（河口1974）ほかの出土例では、

口縁沿いと頸部から肩部にかけて、水平方向に2本の凸帯を貼付するのが基本型であるが、本貝塚出土例では、凸帯を折り返すか湾曲させて貼付する例が目立つ。

第3図9の土器片は、内面に輪積み製法による粘土紐の継ぎ目が残されている。確認された継ぎ高は10.4～11.4mm。器面の残存が良好な部位を観察すると、外面は同図1及び3のようにわずかに条痕が残る例もあるが、ほとんどの表面はなで消しにより平坦に仕上げられている。また、口縁部あるいは口縁近くの破片で内面の残りが良い資料では、内面の条痕が残される例が目立ち、なで消しで丁寧に仕上げられた外面との差が目立つ。

器厚は口縁部で5～7mm、沈線の施された胴部では4mm前後と全体に薄い。第3図9の破片を例に取ると、凸帯近くで6.5mm、その下方で3.7mmとなっている。また、同図15の胴部資料は平均4mmと最も薄く、胴部片の器厚を総じても最大4.6mm、最も薄い部分では3.4mmにとどまる。

胎土混和材は1～3mm大の石英やチャート粒が多く含まれる。本資料が無文であれば、伊波・荻堂式土器との区別が困難なほど近似している。なお、第3図15・17・19の3点には0.5～1mm大の金雲母薄片が見られる。

2) 仲泊式土器群（第3・4図、図版1）

浦添貝塚が発掘された1970年代前半のころ、二枚貝腹縁による施文土器は、市来式土器と深い関わりがあると考えられていた。そのため、1973（昭和48）年に調査が行われたうるま市隅原遺跡の調査概報（高宮ほか1976）では、まだ型式名が設定されていなかった仲泊式土器を「類市来式土器」と称している。また、伊平屋村久里原貝塚（岸本1981）では、型式未設定土器として報告している。

その後の1982（昭和57）年には、前出の土器が仲泊式土器と仮称され型式化される。その特徴として、本型式は尖底ないしは丸底の深鉢型土器で、文様は二枚貝腹縁部を押した貝刻文と沈線を組み合わせる仲泊a式土器及び、沈線だけで構成される仲泊b式土器の2種の存在が報告された（當眞・上原1982）。

次に1983（昭和58）年から翌年にかけては、古我地原貝塚（島袋編1987）の発掘調査が行われ、多数

の仲泊式土器が出土したこと、仲泊式土器の型式名が定着することとなった。

この一群として、肥厚した口縁部に貝殻腹縁を押しつけ、その下方に斜沈線を施文する例が3点得られており、第3図22の1点を図化した。破片は口唇下2cmまでを肥厚させ、継ぎ目のような1~2mmの段差を経て胴部へと至る。器厚は5.3~7.8mmで、混和材は1~3mm大の石英及びチャートである。

第4図Eは第一次調査時の資料で、当時は市来式としても相違ないと考えられていた土器である。肥厚部に貝殻文、その下位に斜沈線が施される。同図Fの土器は口縁沿いに貝殻文、下方に斜沈線様の文様が見られる。

第3図25・26の土器は、仲泊式に相当するとみられる沈線文土器である。25は口唇部と内面の口縁沿いに突き刺すように連点が施されている。同図23・24は混和材に金色の1~2mm大の雲母片を混入し、同図26の資料と同一個体と思われる。

器形については、第3図25の破片から口縁部が内側に傾くことが確認でき、25・26は山形口縁部の頂部を方形に切り込むように成形されている。26を見ると、粘土が軟質な成形時に、籠状の施文具で上部から押しつけたため、切り込み部の下端部が盛り上がるようになる。

第3図27は、肥厚口縁部に押し引きつつ刻文を施している。施文方向は口縁沿いで左から右へ進み、途中で下に折り返すように左方向に施文する。この時点までは本貝塚の「奄美系」と呼ばれていた土器と共に通するが、肥厚部の下に鋸歯状あるいは折帶文状の斜沈線が見られる。

本貝塚出土の「いわゆる奄美系土器」では、肥厚部の段差部分に施文する例はあるが、明確に肥厚部の下位に文様が確認できるのは、本例と後述の一例だけである。本資料は仲泊式と「いわゆる奄美系土器」との関係を検討する一例として本群に含めた。同図28も肥厚部とその下位に沈線が施される資料である。

3) 宇宿下層式土器群（第4~7図、図版2~4）

本群の文様帶は口縁部近くに限られ、施文部位は胴部との段差をつけている。ここでは次の3グループに分けて検討した。

a : 口縁から段差のある部分までが残存

b : 段差が確認できる

c : 段差が確認できない

この中でcグループ中の沈線文だけが施された土器片には、仲泊式に属する可能性のある資料が含まれるが、本貝塚の資料のみでは両者の区別は困難であることから、今回はこの一群に含めた。

このaグループの口縁から段差部までが確認できる土器は10点で、第5図G・H、第7図Iほかを加えても少ない。なお、第5図46~52は同一個体と考えられる。本群は文様の組み合わせで次の二種に大別できる。

(イ) 押引きながら刻む文様だけの例（第4図30~33・35・38~42、第5図46~52）。

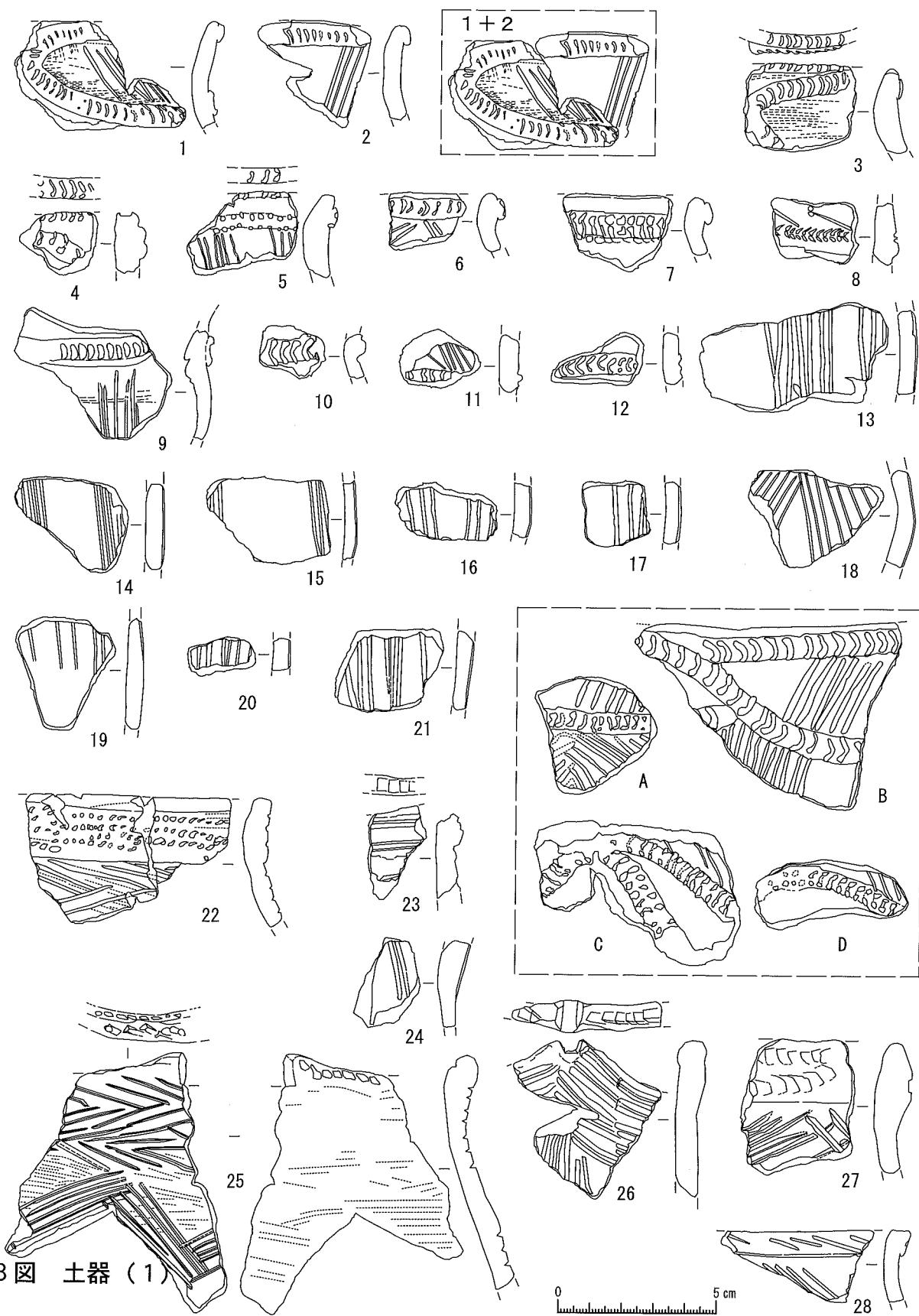
第4図30~33の土器は同一個体と判断される資料である。この中で32・33は外面の摩耗が激しいが、割口は多少角が取れた程度である。上面観は口縁部角がほぼ直角に折れて方形を呈すことから、市来式土器と同じ形状を持つことが確認できる。口縁部分の断面は、第4図33の断面図Aでは胴部との段差が明瞭だが、角部以外では断面図Bのように、文様帶と無文の胴部との段差は1mm程度と浅い。第4図34の口縁部は、口唇上部に文様が確認できないが、摩耗の程度が30~33の土器と類似するため、同一個体の可能性が高い資料として、並列して図示した。

(ロ) 前者の文様と沈線を組み合わせた例（第4図36・37）。

文様帶と無文胴部の段差はわずかで、第4図36が1mm、同図37でも2mm弱である。37は内外面において成形時に籠でなでたような痕跡が見られ、文様を押し引いた部分には、植物質の施文具と思われる痕跡が残されている。

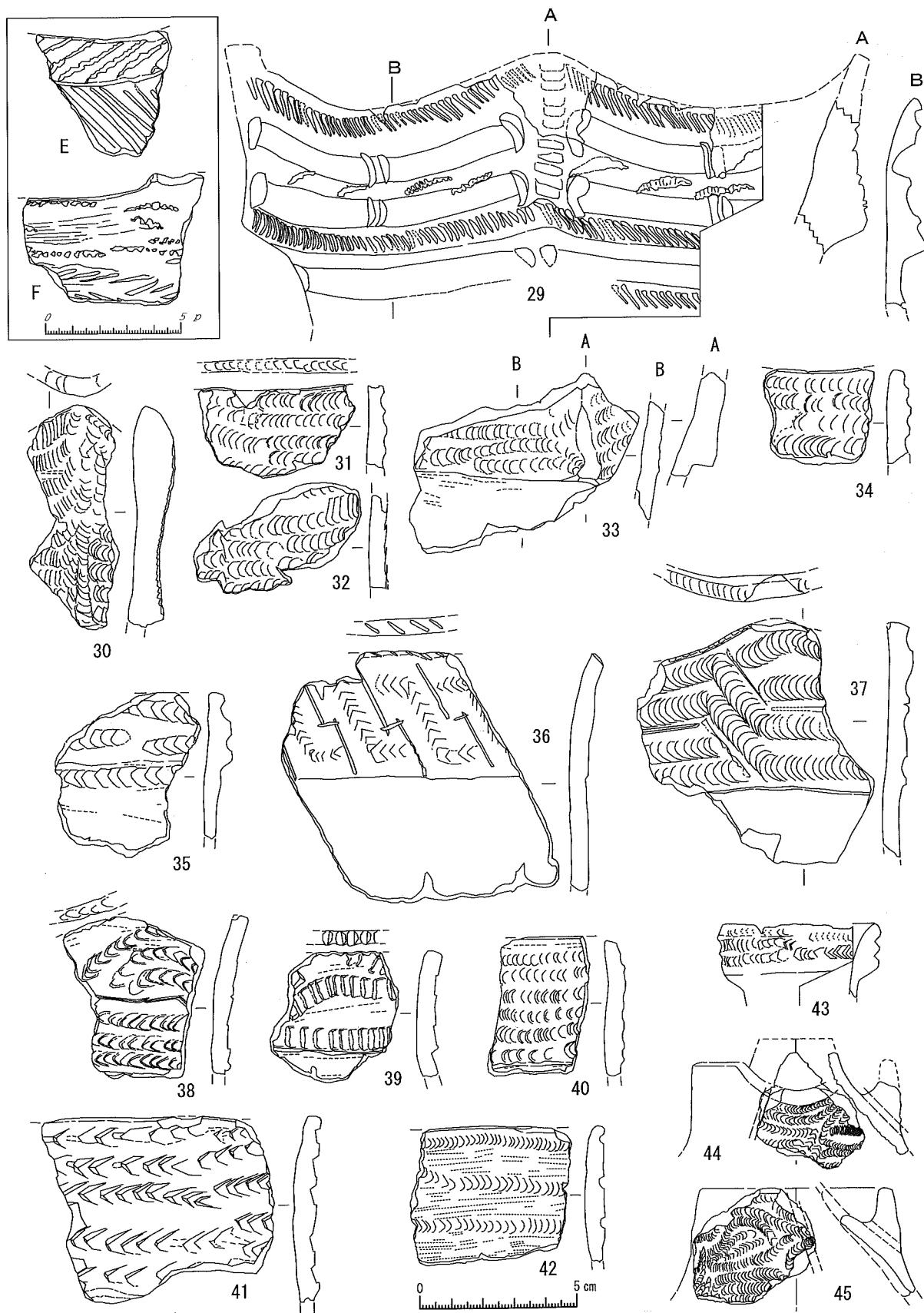
次に段差が明瞭な資料の文様について観察すると、(イ) 押引きながら刻む文様単独の資料、(ロ) 押引刻文と沈線文の組み合わせ、(ハ) 沈線文のみ、の3種に大別される。段差部の断面形状は、第5図53の土器が「く」の字状で、他は1~3mmの段差のみである。

次に段差が見られない資料においても、(イ)(ロ)(ハ)の3種があるが、この中で第6図103・104・108などは断面を見ると、破片上部がやや内湾する



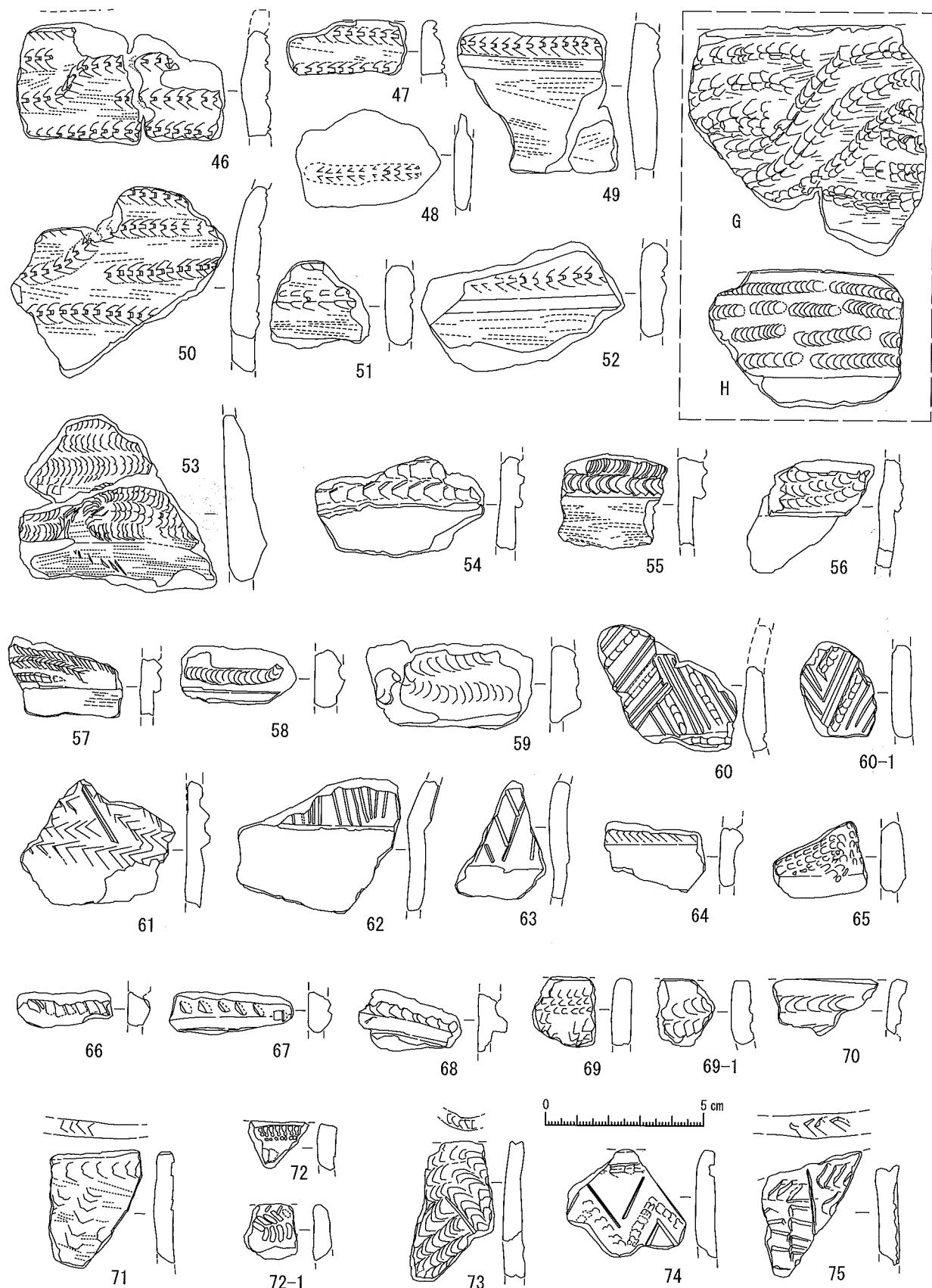
第3図 土器(1)

面縄前庭式土器群 (1~21・A~D)、仲泊式土器群 (22~28)

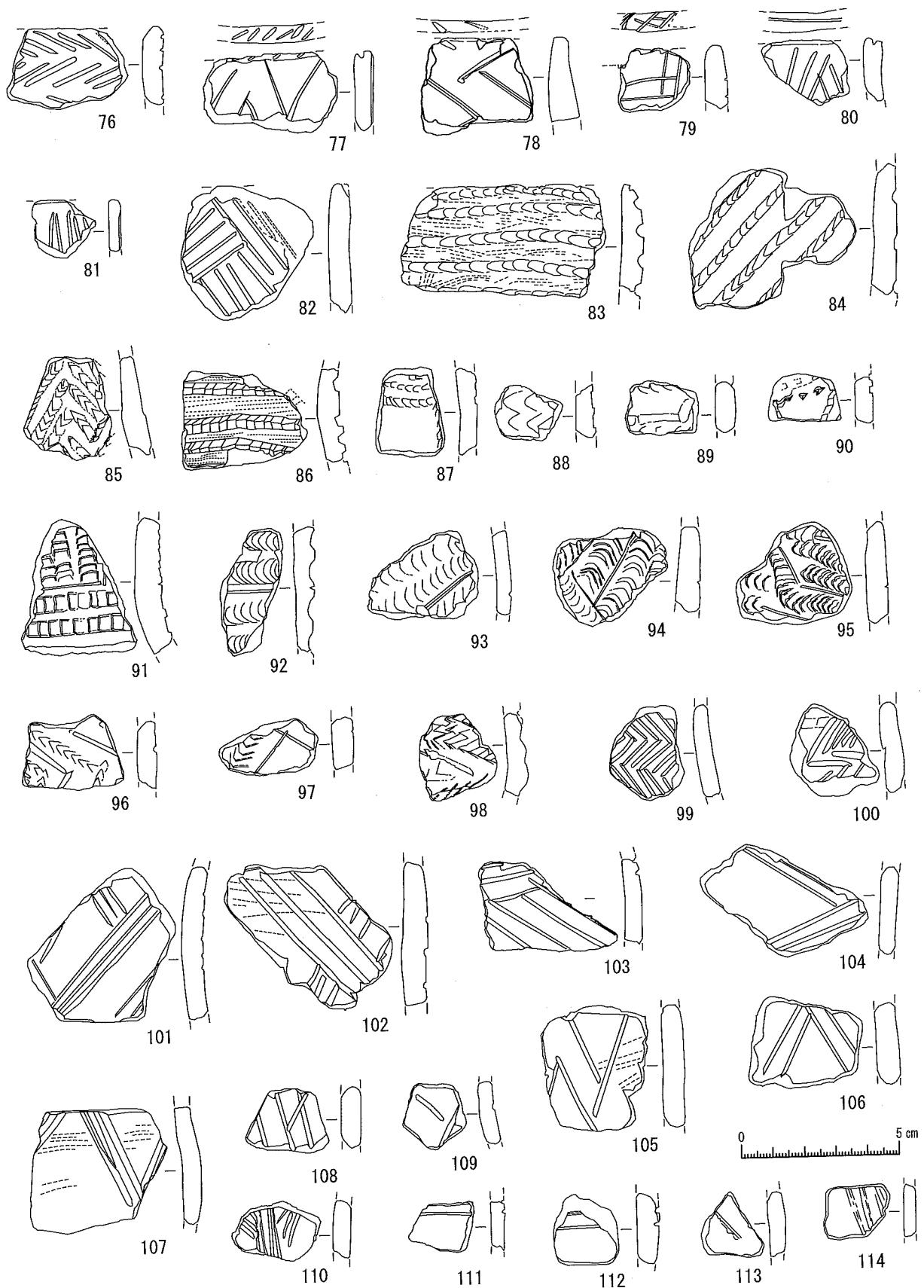


第4図 土器(2)

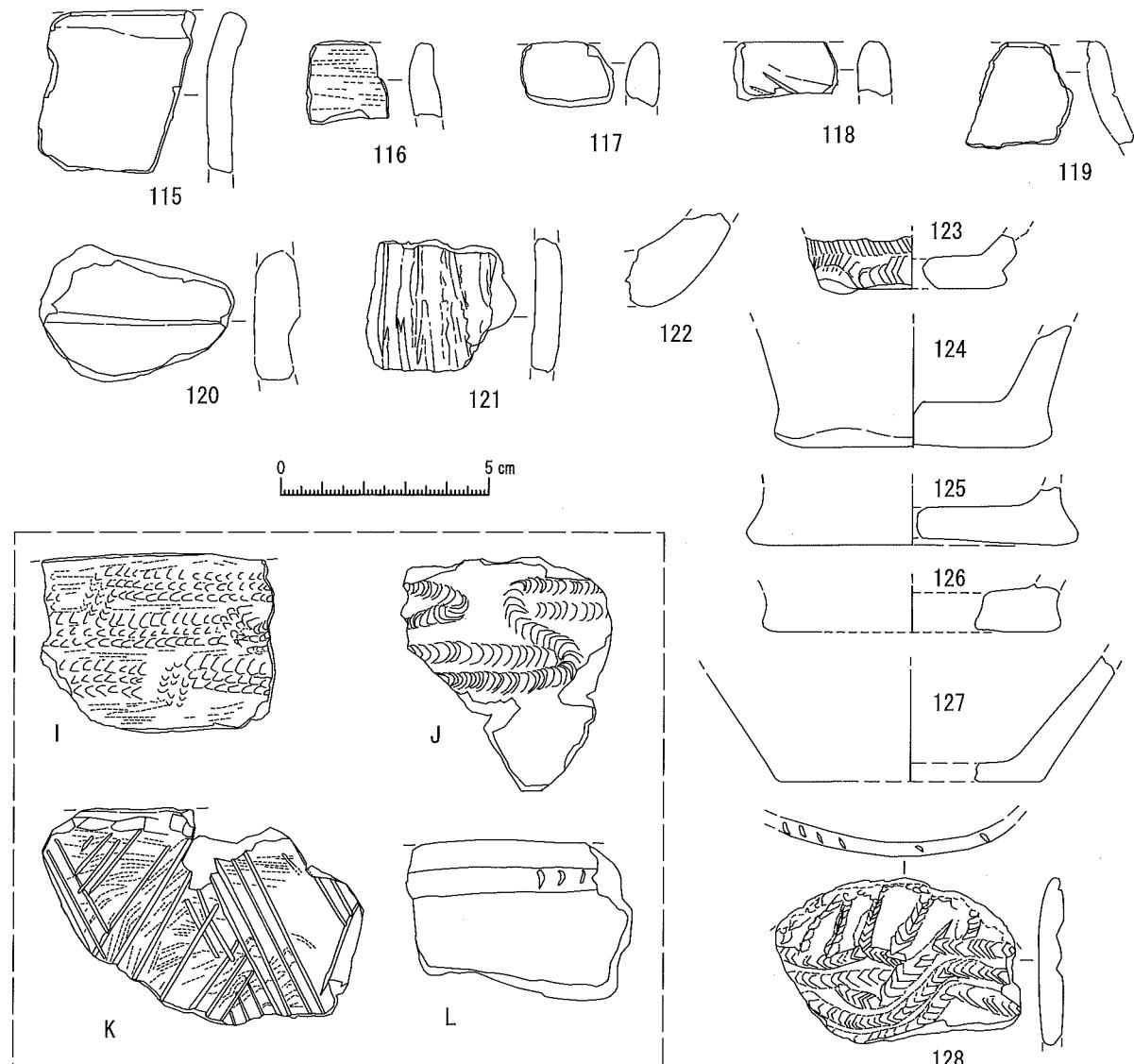
仲泊式土器群(E・F)、市来式土器(29)、宇宿下層式土器群(30~45)



第5図 土器（3）宇宿下層式土器群(46~75)



第6図 土器(4) 宇宿下層式土器群(76~114)



第7図 土器(5) 無文土器(115~121)、底部(122~127)、宇宿下層式土器群(128・I~K)、面縄前庭式土器群(L)

第1表 土器対照表『南島考古』・『古代文化』

本稿		南島考古		古代文化	
図	図版	図	図版	図	図版
第1図1	図版1-1			図版第十・5	
第1図3	図版1-3			図版第十・9	
第1図5	図版1-5	第4図13		図版第十・14	
第1図7	図版1-7	第4図9		図版第十・11	
第1図9	図版1-9			図版第十・10	
第1図14	図版1-14	第3図24		図版第九・6	
第1図22	図版1-22	第3図2		図版第十・6	
第1図25	図版1-25	第3図15?		図版第九・11	
第1図27	図版1-27	第3図5			
第1図A	図版1-A	第4図11		図版第十・8	
第1図B	図版1-B			図版第八・9	
第1図C	図版1-C	第4図12		図版第十・7	
第2図29	図版2-29	第3図1		図版第八・1	
第2図30	図版2-30			図版第十・2	
第2図31	図版3-31			図版第八・5	
第2図36	図版4-36			図版第十・3	
第2図37	図版5-37			図版第八・4	
第2図39	図版6-39			図版第九・14	
第2図41	図版7-41	第3図9		図版第八・11	
第2図42	図版8-42	第3図11			
第2図43	図版9-43			図版第十・15	
第2図E	図版10-E	第3図3		図版第八・2	
第2図F	図版11-F			図版第九・10	
第3図50	図版12-50			図版第八・10	
第3図53	図版13-53	第3図5		図版第九・4	
第3図54	図版14-54			図版第十・12	

本稿		南島考古		古代文化	
図	図版	図	図版	図	図版
第3図55	図版3-55				図版第十・13
第3図63	図版3-63	第4図8			
第3図64	図版3-64	第4図4			
第3図76	図版3-76	第3図7			
第3図77	図版3-77	第3図13			
第3図G	図版3-G	第3図8	第3図8	図版第九・3	
第3図H	図版3-H	第3図3		図版第九・2	
第4図79	図版4-79	第3図17			
第4図80	図版4-80	第4図1			
第4図81	図版4-81	第3図18?			
第4図85	図版4-85	第3図20			
第4図87	図版4-87	第4図87			
第4図88	図版4-88			図版第八・3	
第4図89	図版4-89			図版第十・1	
第4図94	図版4-94	第3図14		図版第九・15	
第4図102	図版4-102	第3図21		図版第九・13	
第4図104	図版4-104	第4図5			
第4図105	図版4-105	第4図6			
第4図108	図版4-108	第4図2			
第4図109	図版4-109	第4図3			
第4図110	図版4-110	第4図14		図版第九・5	
第5図118		第4図15			
第5図123				図版第十・17	
第5図131				図版第八・6	
第5図K		第3図19		図版第九・8	
第5図L				図版第十・16	

ことから、これらの部位は口縁直下か胴部であると考えられる。本資料の位置付けは、本群土器の文様帶が口縁段差部から上位に施文される例からすると問題はあるが、ここでは本群に含めた。

第4図43は壺形土器の口縁部で、口径48mm、先端が三角に尖る施文具で押引きながら文様を刻んでいる。文様は左から右に施文し、途中で階段状に下る部分が2ヶ所見られる。

第4図44・45は同一個体で、発掘直後は44の右位に45の破片が接合されていた。しかし、今回検討してみると、かつての接合とは左右逆位置になるが、上部からの穿孔部位が一致する可能性が考えられた。これを確認しようと試みたが、接合面が剥離しているため不可能であった。本資料は嘉徳遺跡出土の二重口縁土器と類似する例であろう。

4) 市来式土器（第4図、図版2）

第4図29に示した市来式土器は、第4ピット第II層下部からの出土である。出土部位は、口縁を含む胴上部の一部である。

口縁部は四隅が突出し、上面観は方形を呈す。また、その断面は「く」の字状に肥厚しており、文様帶は肥厚口縁部及びその直下まで分布している。肥厚部角では、上下にかけて刻文が施され、肥厚部文様帶の上下縁辺に沿い、籠状の施文具により斜沈線を左から右に細かく連続して刻文する。この上下の斜沈線間には、幅約1cmの太い凹線が2段あり、両凹線の起点・中央・末端には、三日月状の鮮明な刺突文がある。この2段の凹線間には二枚貝腹縁を押しつけたとみられる文様が、一面につき横位に4ヶ所ずつ施されている。

この肥厚部直下には、肥厚部と同様な凹線が肥厚部角間の範囲で1条引かれ、両端に三日月状の刺突を施す。続いてその下位には斜沈線を左から右に連続して細刻している。

外器面には細かなひび割れが見られ、混入物として2~4mmの石英、チャート及び1~2mm大の金雲母薄片が目立ち、他の土器と異なる印象を与える。この混和材の量は、本貝塚出土土器で最も多い。

口縁部角の破片は3ヶ所確認できる。これらを接合後、石膏復元（図版3-29-1）した方形口縁部の対角線距離は、203mm及び206mmで、残存する側面部2

面の幅は、120mm及び111mmである。この数値から対角線距離を算出すると、約170mm及び157mmの数値が得られた。この値を基にすると、対角線距離は現況より約3cm縮小したサイズになる。

5) 無文土器（第7図）

第7図115~121はいずれも小破片であるが、無文土器になる可能性がある資料である。同図120は、表面に残された付着物が浦添貝塚の出土資料と明らかに異なるため、保管時に他遺跡の資料が混入した可能性がある。同資料は肥厚した断面形状と石灰岩質の粒子が混和材の主体であることから、カヤウチバンタ式土器と判断される。

6) 底部（第7図）

第7図123は、図上復元による底径は46mmで、先端が三角形状に尖る施文具で押し引くように文様を刻み、内外面ともに丁寧に研磨されている。同図124~126は断面図のみを見ると、アカジャンガ一貝塚（金武ほか1980）などのくびれ平底と近似しており、混和材にも2mm以下の赤褐色の粒が見られる。本貝塚が奄美系土器主体の遺跡でなければ、後期土器の底部と見まがうほど酷似する。同図127の底部は、伊波・荻堂式の底部と類似する。その他、底部資料の中に削り成形の見られる小破片が確認されている。

石器（図版5）

石器は合計19点が出土しており、その内最も多く得られたのは敲打器類である（第2表）。

図版5-6・8・9は側縁を両面から打割したもので、6は幅49mmと扁平を呈すことから、打製石斧の軸部と思われる。敲打器は8点出した。石器中最も多く、その大半は同図版1~4のように小振りである。

図版5-10は、石杵と報告（新田1971）されているものである。表裏面及び側面の4ヶ所に敲き痕、裏面上部に数回の剥離がみられる。磨り石であろうか。

図版5-11は石皿の破損品で、中央部に大きな凹みが認められる。この凹みの広がりから当初の大きさを想定すると、大型の石皿になると思われる。石質は細粒砂岩製で、両者は3ピットからセットされ

第2表 石器観察一覧

No.	種類	石質	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照	
				縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古
1	敲き石	砂岩	完形	66	54.5	37	209	平面: 楕円。横断面: やや方形。側縁に敲き、他は研磨。石英脈が斜めにあり。	4	75~90	—	5-1	—	—
2	敲き石	砂岩	完形	77.5	53.0	56.5	46.2	平面: 椭丸方形。横断面: 方形。加工: 表裏・側面に敲き、裏面が敲きは強い。他は研磨。	3b	130	—	5-3	—	—
3	敲き石	砂岩	4/3 △61.6	52.7	39.7	156	平面: 楕円。加工: 敲き。	3	150~165	—	5-2	—	—	
4	敲き石	片状砂岩	4/3 △10.4	91.8	30	432	平面: 楕円、裏面は打損後、側面に打割。加工: 表の中央に敲き。	4	75~90	—	5-7	—	—	
5	敲き石	石灰質砂岩	完形	68	55.5	32.5	164	平面: 不定形。加工: 周縁は打割。中央および側面に敲き、表面は研磨。裏面は自然。	5	120~135	—	5-9	—	—
6	敲き石	安山岩	破損			113	加工: 一部研磨。	—	—	—	—	—	—	—
7	敲き石	石灰質砂岩	完形	76.5	45.5	29	150	平面: 縱椭円。加工: 側縁は打割後剥離。他は研磨。鐘乳石?	—	—	U-433	5-4	—	—
8	敲き石	輝緑岩	完形	99	66.8	35.3	389	平面: 若干くびれた楕円。加工: 中央・側縁に敲き特に片側は敲きが強くくびれる。他は研磨。	—	—	U-377	5-5	—	—
9	円盤状	片状砂岩	完形	71	57.2	19	95	平面: やや台形。加工: 周縁打割。二次利用か。	—	—	U-377	5-8	—	—
10	磨り石	砂岩	完形	178	107	81	2600	平面: 縱椭円。加工: 全面の中央に敲き。表裏面の上方は剥離後研磨。	—	—	—	5-10	図版 11-2	—
11	石皿	細粒砂岩	破損	197	195 (174)	105 (64)	6000	平面: 台形。加工: 凹みあり、表面は深く裏面は浅い。	—	—	—	5-11	図版 11-2	—
12	石皿	片状砂岩	完形	△100	△54	33.5	142	平面: 不定形。横断面: 扁平。加工: 一部研磨。	4a	127~150	—	—	—	—
13	石斧		細片	△	△	△	4	刃部、片刃か。加工: 刃部周辺研磨。	4a	127~150	—	5-12	—	—
14	打製	片状砂岩	破片	△	△	△	111	加工: 周縁打割。	—	—	—	—	—	—
15	打製	輝緑岩	破損	△24	49	15.7	40	打製石斧の軸部か。横断面: 扁平。 加工: 周縁打割。U-378。	—	—	U-378	5-6	—	—
16	打製	片状砂岩	破損	61.7	35.8	12.1	40	横断面: 扁平。加工: 周縁打割。	—	—	U-378	—	—	—
17	破片	砂岩	5/1	△65.5	△32.5	△23.7	52	平面: 不定形。横断面: 三角形。加工: 一部研磨。	4	75~90	—	—	—	—
18	破片	輝緑岩	細片	△	△	△	4	横断面: 扁平。加工: 一部研磨。	4	135~150	—	—	—	—
19	破片	砂岩	細片	△	△	△	1	小破片、詳細不明。	3	—	—	—	—	—

第3表 石製品一覧

No.	種類	石質	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照	
				縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古
1	ノミ状製品	千枚岩	完形	31.4	10.4	2.8	1.7	平面: 長方形、横断面: 扁平。加工: 両端に付刃、両面研磨。刃こぼれあり。	—	—	U-4	6-1	—	—
2	有孔製品	サンゴ	破損	28	21	30	22.4	平面: 椭丸方形。加工: 中央に穿孔。孔の周縁に敲きの痕。孔径6.8mm。	—	—	U-247	7-4	—	—
3	有孔製品	サンゴ	完形	52.8	20	9.2	14.1	平面: 長楕円。加工: 自然。加工: 上方に穿孔。形は楕円、両面穿孔。	—	—	U-459	7-5	—	—

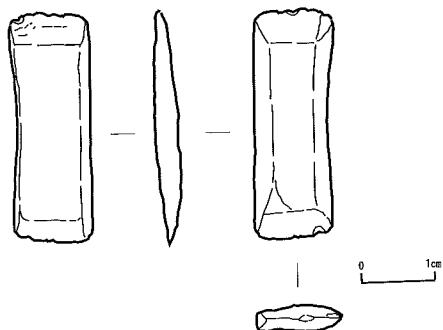
た状態で出土している（新田1971）。

石質においては、砂岩質の石器が占める中、県内に産しない輝緑岩製の敲き石ほか2点が含まれております。今後産出地の特定が望まれる。

石製品（第6図、図版6-1・7-4・5）

石製品は3点出土している。第3表に観察一覧を示した。

第6図・図版6-1は両端に附刃するものでノミ状石製品と仮称する。類例はシヌグ堂遺跡（金武ほか1985）などの縄文晩期の遺跡で出土しているが、これらは本貝塚出土資料より少々大きめである。また、本資料は図版6-2・3の貝製品に大きさ及び端部が薄くなる点で共通していることから、同様な用途が想定される。



第6図 石製品（ノミ状石製品）

第3表に示すように、サンゴ製品は2点出土しているが、それぞれ種が異なる。図版7a-5は灰褐色を呈す軟質のサンゴで、4はキクメイシサンゴに穿孔したものである。前者は津堅島キガ浜貝塚（比嘉1978）、後者は笠利町用見崎遺跡（中山1995）の出土資料に酷似する。

チャート（図版5-12～25）

チャート片は19点得られ、その大きさは0.29～5.8gの範囲のものである。重量による分布をみると、0.9g台7点、1.0g台4点、2.0g台1点、3.0g台1点、4.0g台2点、5.0g台1点で、全体に小型のサイズが多い。2点の石鎌未製品（図版5-18・24）が出土し、剥片も多数見られることから、石鎌を当地で製作していたことが想定できる。また、この中には石鎌には不向きな石英が貫入したもの（図版5-22）

や節理面を有するもの（図版5-14）も見られるが、本貝塚出土土器の混和材にチャートが確認されていることから、一部は混和材として使用していた可能性も考えられる。

貝製品（図版6・7a）

貝製品は合計14点出土した。内訳は第4表のとおりで貝鏃3点、スイジガイ製利器1点、ホラガイ有孔製品1点、メンガイ有孔製品1点などの実用品が6点、サラサバティラとメンガイ製の貝輪が各1点、貝玉2点、札状製品2点、ソメワケグリ有孔製品1点などの装飾的なものが合計7点、イトマキボラの穿孔貝製品が1点である。これらの貝種から、サンゴ礁の岩礁に棲息する貝が製品として用いられていることがわかる。

図版6-6・7は貝鏃で、真珠層を持つ貝を二等辺三角形状に加工し、底辺側のほぼ中央に孔を施したものである。古代文化で3点が報告されているが（新田1971）、今回確認できたのはその内2点である。6はヤコウガイ、7はクロチョウガイである。

札状製品は、アンボンクロザメなどの大形イモガイの体層部を縦位に切り取り、板状に加工したものである。図版6-2・3の2点が得られた。3は完形で、イモガイの肩部を利用している。2は破損しているが、3よりも若干厚手で下端は刀状に薄くなる。広田遺跡ほかで出土する貝札とは異なるため、「札状製品」と仮称した。類例は古我地原貝塚で出土している。本製品は、図版6-1の石製品に大きさや形状が酷似していることから、同様な機能が想定される。

貝玉はマガキガイや小・中型のイモガイの螺塔部を円盤状に加工し、研磨したものである。図版6-4・5の2点が得られた。いずれも螺塔及び裏面がかなり研磨され、側面との間に研磨による稜線が明瞭に見られる。また、螺塔にアバタが数個見られることから、海浜に打ち上げられた貝を利用したと思われる。本品は奄美・沖縄諸島において多数出土する製品であるが、研磨が顕著な製品は少ない。

図版7a-2はスイジガイ製利器の刃部片で、1点が得られた。本製品は上原分類（上原1981）による突起①の部分で、横刃一平刃に相当する。加工は附刃部分のみで、顕著に研磨が施されている。

第4表 貝製品一覧

No.	種類	製品	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照		
				縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古	
1	カバミナシ	自然	完形?	5.3	3.1		7.1	外唇付近。殻表は風化氣味で周縁摩耗。孔あり。黒住耐二確認。	—	—	U-92	6-8	—	第5図-12	
2	ヤコウガイ	自然	破片	4.8	1.4		3.9	体層。殻表あり。周縁は自然の割れ。自然貝の可能性が高い。	—	—	U-297	7-3	—	—	
3	メンガイ類	貝輪	破片	7.3			8.5	外輪の幅8mm。外縁、内縁とも摩耗。	—	—	U-2	6-11	—	第5図-3	
4	イモガイ	貝札	完形	62	11.7	2.5	3.7	外唇利用。短冊状で研磨顯著。	—	—	U-2	6-3	図版11-14	第5図-7	
5	イモガイ	貝札	破片	31	8.2	3.4	2.1	外唇利用。研磨顯著。	—	—	U-22	6-2	図版11-13	第5図-8	
6	マガキガイ?	玉	完形	17	18.2	8	2.7	殻頂利用。研磨顯著。殻表にアバタが数個見られる。孔径5.5mm、内→外に穿孔。	—	—	U-2	6-4	図版11-12	第5図-9	
7	マガキガイ?	玉	破片	15	—	3	0.5	殻頂利用。表裏面とも研磨顯著。肩部角は明瞭。孔は中央部は自然か。径4.5mm、殻軸の摂理。	—	—	U-97	6-5	—	第5図-5	
8	ヤコウガイ	貝繖	破片	△33	19	2.2	1.7	体層利用。研磨顯著で中央は稜をなす。裏面は平らで、基部側は殻口利用。孔径2mm、両面穿孔。	—	—	U-2	6-6	図版11-4	第5図-2	
9	クロチョウガイ	貝繖	破片	△22	18	—	1.1	研磨顯著。表面は中央に稜をなし、裏面は平らである。孔は3mm、両面穿孔。	—	—	U-8	6-7	図版11-5	第5図-4	
—	クロチョウガイ	貝繖	破片	—	—	—	—	遺物未確認。	—	—	—	—	図版11-6	—	
10	サラサバティラ	貝輪	破片	63	12	10.9	8.5	内縁は打割、外殻は研磨顯著。内殻は自然。	1a	105~120	U-25	6-10	—	—	—
11	ホラガイ	有孔	破片	280	100.4	80	276	体層のみ残。殻全体にアバタ多し、風化著しい。殻頂は円味。孔は内層側と体層側にあり。孔形は楕円。孔①30×23.2、孔②26.2×21。	—	—	—	7a-6	—	—	—
12	ソメワケグリ	有孔	完形	32	33	—	5	右殻。殻全体摩耗、アバタ有。外殻から研磨、穿孔、楕円、孔径3.5×2.8。	4b	105~120	U-467	6-9	—	—	—
12	メンガイ	有孔	完形	59	59	—	25	左殻。殻全体摩耗。穿孔、孔縁はシャープで自然か。孔径19.8×15.6、内→外。不定形。	3	105~120	U-434	—	—	—	—
13	イトマキボラ	有孔	完形	157	81	—	158	貝殻の突起を若干破損。体層に穿孔するが、自然の可能性が高いが、何らかの利用の可能性も否定出来ない。孔径18.3×13.3、外→内穿孔。不定形。	—	—	—	7a-7	—	—	—
14	メンガイ	有孔	破片	84	—	—	27	左殻。アバタ有、打割2回、製作途中か。孔径40mm、内→外。	—	—	U-462	—	—	—	—
15	スイジガイ	利器	破片	41.5	16.5	19.0	14.5	突起①を両面研磨。	—	—	—	7a-2	—	—	—
16	ヤクシマダカラ	有孔	破片	65.9	—	26.2	19.1	内唇のみ。外唇、外殻にも研磨痕。色残、光沢有。孔は外→内に穿孔。	3	—	U-3	7a-1	—	—	—

第5表 骨製品一覧

No.	種類	部位	形状種類	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照			
					縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古		
1	イノシシ	左下顎犬歯	装飾	破損	89	17	7.2	8.9	先端～両面穿孔。	—	—	—	8-2	図版11-10	—	—	
2	イノシシ	左下顎犬歯	装飾	破損	58	17.2	8.8	13.9	基部と犬歯のエナメル質部分およびその境面に研磨。孔は基部(6.8mm)と先端部は両面に穿孔(4mm)。いざれも両面穿孔。	3a	—	U-105	8-3	—	第5図-6	—	—
3	イノシシ	下顎犬歯	装飾	破損	36.8	6.5	3.2	1.1	イノシシの犬歯の内縁を半裁し、研磨を施し、基部側を内面から穿孔。径6mm。	—	—	U-466	8-1	—	—	—	—
4	クジラ	—	骨輪	完形	—	—	—	—	半環状、横断面は円形(16mm)。両端に孔有。孔径(外径8mm、内径3mm)穿孔方向は外→内方向。	—	—	—	—	図版11-11	第5図-1	—	—
5	クジラ	—	骨輪	完形	—	—	—	—	半環状。両端に孔。	—	—	—	—	図版11-9	—	—	—
6	クジラ	椎体か	板状	破損	62	48	12~5	32.9	平面:方形。一边に幅23mmの突起か。厚さは不均一。加工:研磨は顯著、表面一細かく、裏面～海綿組織が残る。	—	—	—	8-7	図版11-3	第5図-B	—	—
7	イノシシ	四肢骨	板状	完形	55	16	4	3.6	弧状、両面研磨、加工有り、半裁、研磨、両端研磨。	—	—	—	8-5	—	—	—	—
8	イタチザメ	歯	有孔	完形	15.5	23	4.8	—	加工:歯冠は摩耗しエナメル質がはげる。全面とも研磨は顯著で光沢がある。中央に孔。外径5mm、内径2mm。孔縁に抉り、紐ズレか。両面穿孔。	—	—	U-5	—	図版11-7	第5図-11	—	—
9	クジラ	—	刺突具	完形	104	7.5	7.8	6.7	棒状。両端とも尖る。片側を削り、平坦となる。	—	—	—	8-8	—	—	—	—
10	クジラ	—	刺突具	破損	—	—	—	—	先端尖る。横断面:円形(径16mm)、加工:顯著で光沢。	—	—	—	—	図版11-8	第5図-10	—	—
11	クジラ	肋骨か	未製品	破損	33.5	13.4	10.8	6.0	先端欠損、基部は楕円(7×9mm)。加工:全面に荒削り、基部～横位に削りの痕。	—	—	U-230	8-6	—	—	—	—
12	イノシシ	腓骨	—	破損	26.2	5.9	3.2	0.6	棒状。光沢は研磨によるものか。	—	—	—	—	—	—	—	—

図版7a-6のホラガイ有孔製品は、内唇部分に2ヶ所の粗孔を施すもので、体層から外唇にかけて破損する。貝殻は全体的に脆いが、破損は被熱が原因と思われる。また、表面にはアバタが目立つ。

図版7a-7はイトマキボラに穿孔するものである。腹面の突起部分に穿孔するもので、孔は一回の打割で開けられている。また、一部外唇も破損しているが、これが意図的か偶発的なものか決めかねる資料である。

図版7a-1はヤクシマダカラの前端と後端に、径8mmの孔を外面から磨って穿孔するものである。破損品で外唇側のみが残存する。後端部の研磨は外縁部分までおよぶ。

図版6-9はソメワケグリの殻頂部分を磨り、小孔を有するものである。外殻の中央付近にアバタが見られる。

貝輪は図版6-11のメンガイ及び図版6-10のサラサバティラがある。前者は貝の成長線に沿うように輪状になる。外殻はアバタが顕著である。後者は体層の角の部分を利用する。内縁に打割の痕が見られ、外殻も一部磨かれている。

その他、未加工品であるが、図版7a-3のようにヤコウガイの貝殻片も出土する。

骨製品（図版8）

骨製品は16点出土しているが、ここでは13点を報告する（第5表）。骨の種類別にみると、クジラ骨製刺突具2点、未製品1点、板状製品5点、イノシシの四肢骨を用いた板状製品1点、腓骨製棒状製品1点、牙（犬歯）製品3点、サメ歯有孔製品1点である。

この中で南島考古（新田1972）及び古代文化（新田1971）掲載分で確認できなかった遺物は、クジラ製骨輪2点、尖頭器1点である。個別の観察は第4表に示し、未確認の製品についての計測は、前記文献の図から数値を起こした。

全体の特徴としては、クジラ骨を用いた製品が多い。図版8-8はクジラ椎体のような大型の骨を加工した未製品である。実用品では両端を削ったヤス状の製品や、径が16mmもある刺突具があり、狩猟や漁撈具として用いられたものと思われる。

そのほか、サメ歯有孔製品（図版8-6）やイノシシ犬歯の有孔製品（図版8-1～3）は装飾品と

考えられる。イノシシ犬歯は、基本的に両端に穿孔するものと、犬歯を環状に半裁し、さらに加工を施したもののが出土している。このような加工は古我地原貝塚（島袋編1987）にも見られる。

貝類遺体（図版9・10）

貝類は本貝塚から最も出土量の多い遺物である。集計はグリッド及び種別に第6・7表で示した。第9表のグリッド別出土量から、第1・4・5ピットにおいて貝の出土が多いのは、調査地が琉球石灰岩のフッシャーになっていたため、のちに陸産貝が流れ込んだためと思われる。

発掘は包含層を15cmごとに掘り下げ、他の遺物と同様に肉眼で確認できるものを取り上げた。

集計は完形・殻頂・殻底・破片に分け、個体数の算出方法は、宜野湾市新城下原第二遺跡（島袋2006）に、棲息地分類は古我地原貝塚（黒住1987）に準じて分類し、分類内訳は第8表に示した。

巻貝は、24科59種で破片数3,580点、個体数1,914個体、二枚貝は12科28種で破片数2,073点、個体数789個体が出土した。総数は破片数5,653点、個体数は2,703個体の出土である。

第11表グリッド別数出土状況をみると、多い順に第4ピット1,894個体、第3ピット1,148個体、第1ピット691個体、第5ピット484個体である。次に深度別に最も出土量の多い第4ピットでみると、70～135cmの下部に集中する。貝の種類は巻貝かオキナワヤマタニシなどの陸産貝が多いが、それ以外にサラサバティラやマガキガイが見られ、二枚貝はヒメジャコ、ヒレジャコ、オキシジミ、イソハマグリなどが多いようである。

第8表の黒住分類による第12表の棲息地別には、V陸産で844個体と最も多い。その中でもオキナワヤマタニシが628個体を占める。IV淡水産は560個体で、カワニナが557個体である。この貝は図版14のように凝集も確認されている（新田1970）。IIIマングローブ域の貝では、シレナシジミが128個体出土している。この貝は時期は下るが、牧港川を隔てた対岸のチヂフチャ一洞穴遺跡（下地ほか1988）でも出土している。貝の大きさ（殻長）をみると、25mm～75mmに収まり、特に45mm～55mmが多い（第9表）。これを他の遺跡と比較すると、新城下原第二遺跡で

第6表 貝類遺体出土状況 I (巻貝)

※目類棲息地の分類は古我地原昌塚（黒住1987）に準じて行い、内訳は裏面第8表に記した。

第7表 貝類遺体出土状況II(二枚貝)

No.	科	種類	出土地 部位 棲息地	表採			0aピット			1ピット			1aピット			2ピット			2aピット			3ピット			4ピット			4aピット			5ピット			不 明			合 計		
				完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	R	L	破片	個体数					
				R	L	R	R	L	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	L							
1 フネガイ科	リュウキュウザルボウ	II - 2 - c																																1	2	2	2		
2 タマカギ科	コタマカギ	I - 2 - c																																0	1	0	1		
3 フネガイ科	エガイ	I - 1 - a																																2	1	0	2		
4 フネガイ科	カリガネエガイ	I - 2 - c																																1	0	0	1		
5 フネガイ科	ベニエガイ	I - 2 - a																																0	1	35	1		
6 ウグイスガイ科	クロチョウガイ	I - 4 - a																																3	5	0	4		
7 ウミギクガイ科	ウミギク	I - 2 - a																																0	1	0	1		
8 ウミギクガイ科	ダンドクメンガイ	I - 2 - a																															1	1	0	1			
9 ウミギクガイ科	スンガイ	I - 2 - a																															0	2	0	2			
10 ウミギクガイ科	ミスイリショウジョウ	I - 2 - a																														9	11	4	10				
11 ウミギクガイ科	不明	I - 2 - a																														1	2	2	2				
12 ウミギクガイ科	不明	I - 2 - a																														4	3	5	4				
13 イタボガキ科	マガキ	—																														2	1	0	2				
14 ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	II - 2 - c																														0	1	0	1				
15 ザルガイ科	ハナザルガイ	II - 2 - c																														134	113	18	116				
16 シャコガイ科	ヒメジャコ	I - 2 - a	2	4																											6	4	1	5					
17 シャコガイ科	ヒレジャコ	I - 2 - c			1	1																								3	10	5	9						
18 シャコガイ科	シラナミ	I - 2 - a																												1	14	6	2						
19 シャコガイ科	不明	I - 2 - c																												2	12	1	15						
20 シャコガイ科	シヤコウ	I - 2 - c																												1	1	1	1						
21 チドリマスオガイ科	イソハマグリ	I - 1 - c	9	18	1																									34	30	4	6						
22 バカガイ科	リュウキュウバカガイ	II - 2 - c																												1	0	0	1						
23 シジミ科	シジミ	—																												1	0	0	1						
24 シジミ科	シレナシジミ	III - 0 - c	3	3		12																							15	9	11	10							
25 マルスダレガイ科	ヌノメガイ	II - 1 - c																												1	1	1	1						
26 マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	III - 1 - c																												5	2	3	4						
27 マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	II - 1 - c																											7	10	3	1							
28 マルスダレガイ科	スダレハマグリ	II - 1 - c	1	1	1	1																							19	12	2	5							
29 マルスダレガイ科	リュウキュウアサリ	II - 1 - c	4	1	1	2																							0	20	19	7							
30 マルスダレガイ科	オキシジミ	II - 1 - c	8	1	1	1																							0	14	21	12							
31 マルスダレガイ科	ハマグリ	II - 1 - c																											1	1	1	1							
32 マルスダレガイ科	不明	II - 1 - c																											1	0	0	1							
33 オキナガイ科	ヒロクシトオリガイ	—																											1	0	2	0							
34 イタボガキ科	不明	—																											0	0	57	0							
35 二枚貝	合計		16	26	5</td																																		

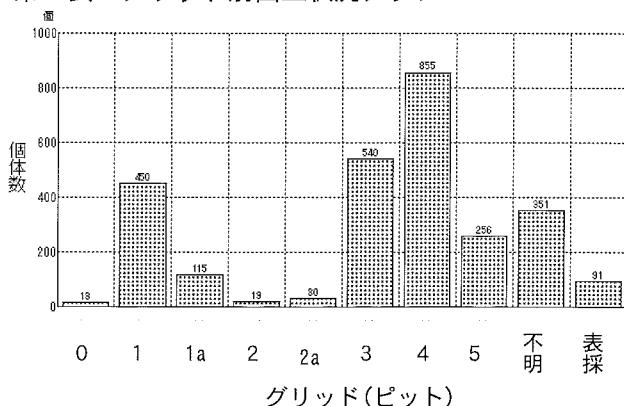
は65mm～85mm、チヂフチャ一洞穴遺跡（貝塚後期）では50mm～70mmが多く出土し、本貝塚出土のものはこれらの遺跡のものに比べて小さいようである。

外洋・サンゴ礁域では、I-2-a（以下、第8表参照）の245個体が得られ、その中でヒメジャコ116個体、シラナミ75個体、ウラウズガイ28個体が出土している。

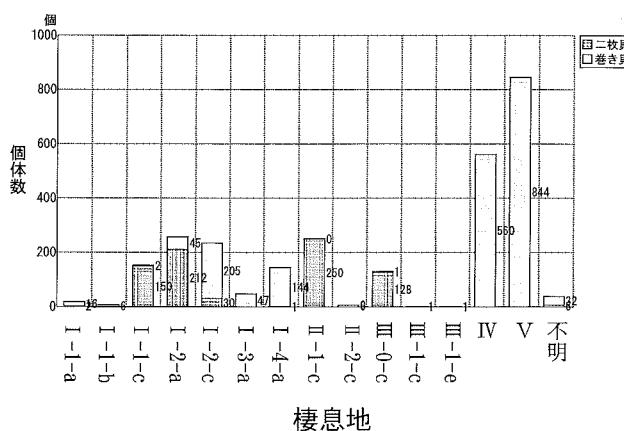
I-2-cは225個体が得られ、マガキガイ183個体が多く出土しているが、クモガイの破片153個も無視できない出土量である。この貝は新城下原第二遺跡でも同じような出土を示しており、マガキガイと並んで西海岸地域の特徴的な貝種のひとつとして位置付けられるようである。

I-4-aは145個体得られた。主な貝はサラサバティラの120個体、ギンタカハマの24個体である。

第11表 グリッド別出土状況グラフ



第12表 棲息地比率グラフ（棲息地分類は第8表参照）



サラサバティラの大きさは殻高84mm×殻径101(82)mmで、殻頂～次体層部分の殻表が剥離する。殻高49mm×殻径58(54)mm殻底近くの殻表が剥離する。

I-3-aは47個体得られ、主な貝はチョウセンサザエである。蓋23点、殻18個体、破片数55点で、蓋の数が多い。また、破片数が多いことから、殻を打ち割り採食していたと思われる。

内湾・転石域ではII-1-cの250個体が得られ、貝種ではオキシジミ171個体、イソハマグリ150個体、スダレハマグリ68個体などが出土している。また、少量ではあるが、焼け痕が見られる貝種は、イソハマグリ、ヒメジャコ、シレナシジミ、オキシジミ、カリガネエガイ、エガイ、リュウリュウサルボウ、チョウセンサザエ殻・蓋、クモガイ、ウラウズガイ、カワニナ、ホラガイ、オニノツノガイ、マガキガイなどが見られた。成因は加熱によるものと思われる。なお、貝種に差異は認められない。

また、近年の移入種であるアフリカマイマイが1個体混入していた。

脊椎動物遺体（図版12～14）

動物遺体の採取も貝類と同じで、15cmごとのピックアップ法によるものである。集計表については紙幅の都合もあり、グリッド・レベルは関係なくまとめた。ただし、出土量の少ないものは一覧で示し、グリッド・レベル・注記についても表記し、あわせて図版番号も示した。

動物遺体の個体数の算出は、魚類は前上顎骨・歯骨に分け、多い方を個体数とした。

イノシシは各部位ごとに分け、近位部（心臓に近い関節部）、骨体（骨の中央）、遠位部（心臓に遠い関節部）に分け、数的に多い方、更に部位の中で多い方をとり個体数とした。以下、それについて略述する。

甲殻類ではウニ・カニ類が出土した。ウニは殻の破片が2点（U-420）確認され、カニはハサミの破片が得られた。

魚類では硬骨魚綱のブダイ科・ハタ科・フエフキダイ科・ヘダイ科・ハタ科・ハリセンボン科などが得られた。ブダイ科はナンヨウブダイとイロブダイ、フエフキダイ科ではハマフエフキが確認できた（第13表）。出土した魚類はいずれも岩礁に棲息する魚種である。骨の大きさをみると、ナンヨウブダイ下咽頭骨の幅は、7.8mm、9.5mmと小さい方である。ベラ科下咽頭骨の歯幅は、エナメル質部分が42.8mm、

第13表 魚骨出土一覧表

科	種	部位	点数			備考	図版
			右	左	破		
サメ目		椎骨		1		椎径21mm	11-1-12
フエキダイ科	ハマフエキ	上顎骨	2	1		28.5mm 37.5mm	11-1-1
フエキダイ科	ハマフエキ	歯骨	2	1	1	25.5mm	11-1-2
ベラ科		咽頭骨			1	歯幅542.8mm、ア65mm	11-1-11
ブダイ科		上顎骨	1		2		
ブダイ科		上顎骨	1		1	26mm	
ブダイ科	イロブダイ	上顎骨	1				11-1-3
ブダイ科	イロブダイ	歯骨	1	1			11-1-4
ブダイ科	イロブダイ	咽頭骨	1				11-1-7
ブダイ科	ナンヨウブダイ	咽頭骨			2	幅7.8mm、9.5mm	11-1-13
ハタ科		上顎骨	1			参考1;46.5mm	11-1-5
ハタ科		歯骨	1		2		11-1-6
ハリセンボン科		歯骨			2		11-1-10
不明		上顎骨					11-1-8
種不明		主上顎骨			2		
種不明		他					
他					35	方骨(1)、鋤骨(1)	
棘					2		
椎骨					20	径3.6, 13, 2.5, 11, 13.5, 10, 12, 9, 7, 4mm	
合計			11	3	67	3	

歯骨幅が65mmで大きい方である。椎骨の大きさは2.5mm~13mmを測り、平均して10mm台が多いようである。

ウミガメ科は2点の破片が確認され、リクガメ科は12点が出土した。部位が確認できるものは、上腕骨、背甲板（縁甲板・頂骨板・肋甲板）、腹甲板（下腹板）で、個体数は頂骨板から3個体が推定される（第14表）。

また、そのほとんどは第4ピット105~120cm及び135~150cmの深い地点から出土している。

第14表 ウミガメ・リクガメ出土骨一覧

種	部位	左右	点数	出土地点		注記	図版
				グリッド	レベル(cm)		
ウミガメ	背甲か腹甲板		2				11-4-1
	上腕骨		1			U-240	11-4-2
リクガメ	背甲板	縁甲板	1			U-240	11-4-5
			1	4	135~150		11-4-3
	椎骨板尾		2	4	105~120	U-466	11-4-7
	肋甲板		1	4	60~75	—	11-4-4
リクガメ	腹甲板		8				
	不 明		1			U-532	
	不 明		1			U-466	11-4-8
	下腹板	左	1	4	105~120	U-466	11-4-8
合計			19				

ヘビ目では椎骨が第1ピット30~40cmで出土している。鳥類は6点出土したが、種類は明瞭でない（第15表）。

第15表 トリ骨出土一覧

種類	部位	左右	部位a	点数	出土地点		注記	図版
					グリッド	レベル(cm)		
トリ				1	3a	90~105	U-230	11-3-6
トリ	四肢骨	不	骨体	1	4	105~120	U-466	11-3-4
トリ	四肢骨	不		1	0a	75~90	U-407	11-3-5
トリ	上腕骨	不	~遠位部	1	4	60~75	—	11-3-3
トリ	尺骨	右	~遠位部	1	b	30~40	—	11-3-2
トリ	大腿骨	左	近位部~遠位部	1	4	105~120	U-466	11-3-1
合 計				6				

哺乳類では海獣類、ネズミ類、イノシシ、イヌなどが出土している。

クジラ類は骨質が密なことから、肋骨と思われる破片が9点出土している。その中には加工痕らしきものが見られる資料も含まれる（第16表）。

ジュゴンは3点で、そのうちの1点は動物解剖学の北條暉幸によって報告された左上腕骨の完形で、全長195mm、重さ460gを測るものである（北條1976）。肋骨は1点で、第3ピット123cmで出土した。横断面の径は30.2×18.4mmを測る。

第16表 海獣骨出土一覧

種類	部位	左右	状態	点数	出土地点		注記	図版	備考
					グリッド	レベル(cm)			
ジュゴン	上腕骨	左	完形	1	—	—	—	12-8	北條1976
ジュゴン	頭骨?	—	破片	1	—	—	—	11-54	
ジュゴン	肋骨	—	ほぼ完形	1	3b1	123	—	11-5-5	径30.2×18.4mm
クジラ	肋骨	—	破片	2	—	—	—	11-5-2	
クジラ	肋骨	—	破片	1	—	—	—	—	
合 計				6					

ネズミは4点確認できた（第17表）。出土部位は下顎犬歯、脛骨、大腿骨である。この内、図版11-2-3・4の大転骨は、その大きさからケナガネズミ (*Diplothrix legata*) のものと思われる。

第17表 ネズミ骨出土一覧

種類	部位	左右	状態	点数	出土地点		注記	図版	
					グリッド	レベル(cm)			
ネズミ	犬歯	上顎	完形	1	—	—	U-320	11-2-1	
ネズミ	大腿骨	近位部	左	破片	1	4	105~120	U-466	11-2-4
ネズミ	大腿骨	P~d	右	1	—	—	—	11-2-3	
ネズミ	脛骨	骨体	不	1			—	11-2-2	
合 計				4					

イヌ骨では下顎骨第二後臼歯が1点確認された。歯冠長は19.3mmを測る。

イノシシ骨はリュウキュウイノシシのものである。出土骨では最も多く、264点が出土した。特に第3ピット90~105cm、第4ピット105~120cmで多く見られる（第10表）。最小個体数は、肩甲骨の数から7個体と考えられる。

また、四肢骨の計測値を比較すると、本貝塚出土のものは小型であることから、幼獣が多いことがわかる（第18表）。リュウキュウイノシシの各部位の状況をみると、頭骨・下顎骨は成・幼獣が見られるが、いずれも破片が細かい傾向がある。

下顎骨では成獣で M_3 の前、幼獣では dm_4 の前で割れているものが数点見られる。この傾向から、尖る前頭骨と後頭骨の部分を目安に解体していたものと思われる。この事象については、他の遺跡にも共通しているのか興味深い。下顎犬歯は雄5点、雌2点が出土した（第19表）。

次にイノシシ四肢骨の計測値を示す。計測の部位は平敷屋トウバル遺跡（金子1996）を参考にされたい。

上腕骨は12点出土した。最小幅SDの計測値は、6.0mm、6.4mm、7mm、70mm、7.3mm、19mm×12.7mm、13.4mmで、新城下原第二遺跡（金子・久貝2006）の最小5.7mm、最大13.1mm、平均10.4mmの値を参考に比較すると、小型の個体である傾向が見てとれる。

尺骨は8点出土した。計測値はSDO11.5mm、20.5mm（新城下原第二：最小15.7mm、最大22.8mm、平均15.7mm）で前者は小さく、後者は焼けて黒～灰色を呈する。他に幼獣と思われる破片が2点出土している。

大腿骨は12点得られた。最小幅SDの計測値は、8.5mm、8.7mmである。

脛骨は10点出土している。最小幅SD計測値は7mm、6.6mm、6.3mm、6.0mmである。腓骨は3点出土した。

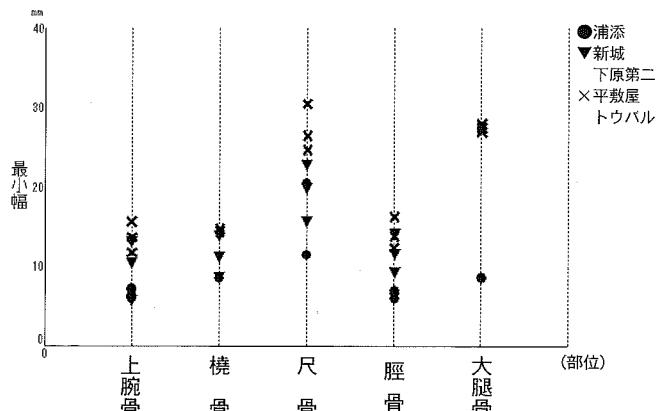
肩甲骨は14点出土した。そのほとんどが骨体～遠位端で、左7点、右2点が出土している。この集計から、イノシシの最少個体数は7個体と考えられる。骨の大きさも様々である。計測値は次の①～③に示した。

①SLC11.8mm、GLP26mm、SD21mm

②SLC14.3mm、7.5mm

③SLC10mm、13.5mm

第18表 イノシシ四肢骨（SD）比較



第19表 イノシシ咬耗度一覧

種類	部位	部位a	新城下原 第二遺跡	出土地点	
				注記	グリッド レベル(cm)
イノシシ	下顎 左	$dm_4(+,-,-)<M_1>$	I-1	U-466	4 105~120
	下顎 左	$dm_4(+,-,-)<トジ>$	I-1	U-466	4 105~120
	下顎	$p_2(-), p_3(-), dm_4(+,+,-), M_1(<欠>)$	I-1		
イノシシ	下顎 左	$M_3(+,-,-)$	III-3:2才	U-466	4 105~120
	下顎 左	$M_2(+++,+)$	V-2:4·5才	U-466	4 105~120
	下顎 左	$M_2(+++,+)$	V-2:4·5才	U-466	4 105~120

寛骨は2点出土した。臼部の計測値はSC18.3mm×11.1mm、橈骨はSD8.5mm（新城下原第二：最小8.7mm、最大13.9mm、平均11.2mm）、脛骨はSD6.0mm、6.5mm、6.6mm、7mm（新城下原第二：最大9.3mm、14.2mm、平均11.6mm）であった。また、距骨が1点出土している。

そのほか、ヒトの右腓骨片が1点含まれる（図版7b）。本資料は筒状のため、腓骨の中央付近と思われる（図版7b人骨部位図）。

考 察

以上、浦添貝塚から出土した資料の報告を行った。考察に際し、あらためてまとめてみたい。

浦添貝塚は、浦添丘陵と称される石灰岩丘陵崖下、標高約70mの傾斜地に形成された遺跡である。その崖上の岩陰には、英祖王の父、恵祖世主のものとされる高御墓が構築されている。この墓の前庭部からは、貝塚出土土器と同型式の土器片が採取されていることから、貝塚上部には浦添貝塚を残した人々の居住域が存在していた可能性が考えられる。

貝塚はその直下で帶状に分布しているため、この堆積物は崖上の居住域から投棄されたものと考えた方が自然であるが、出土遺物からは第Ⅰ層・Ⅱ層間に差異が認められなかつたため、堆積の原因是自然崩落によるものか、あるいは高御墓構築時に人為的に落とされた二次的要因も考えられる。

貝塚の時期については、出土土器のバリエーションからある程度の年代幅を持つと思われるが、遺物包含層は単一で、遺構は確認されていない。次に出土遺物について記す。

土器はすべて破片資料のため全形を窺うことはできないが、文様は先端が三角形あるいは半円状の施文具による押引文が主体となる。また、二枚貝腹縁による貝殻文が施されている資料も出土している。これらの特徴から判明している型式名を羅列すると、奄美諸島において宇宿下層式土器（河口1957）として包括される面縄前庭式、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ式A土器のほか、沖縄島を中心に分布する仲泊a式・仲泊b式土器、南九州の市来式土器及び大隅諸島を圏内とする一済式土器に類似した資料も含まれる。

このような土器形式の概念は、調査時点において、県内では類例に乏しかつたため、その系譜についても判然としない点が多かったが、その後発掘例は増加し、徐々にその様相が明らかになってきた。その一例として挙げると、報告された当初（新田1970・1971）に爪形隆線条痕文土器と仮称していた土器は面縄前庭式土器に、爪形文・刺突文土器は、面縄東洞式及び嘉徳Ⅰ式A土器となり、また、口縁断面の形状から市来式系統とされていた土器は、仲泊式土器として型式名が設定されている。

そのほか、特殊な例として壺形及び二重口縁の面縄東洞式も見受けられる。底部資料の出土は少ないが、尖底及び平底両者の存在が認められる。

これらの土器の胎土混入物には石灰岩粒が見られず、石英、チャート、角閃石、金雲母等が見られること及び、器面調整においても伊波式・荻堂式に見られる櫛目状の擦痕が確認できない。また、沖縄市仲宗根貝塚（嵩元ほか1980）での上層（第V層）から伊波・荻堂式が出土し、下層（第VI層）から面縄東洞式及び嘉徳Ⅰ式土器が出土しているという層位的事実からも、浦添貝塚出土土器は、伊波式・荻堂式に先行するものとして押さええることができる。こ

のような状況から、本貝塚の中心となる時期は縄文後期前半であることが考えられる。

さらに、この胎土混入物のひとつであるチャートに関しては、粒子の角が丸く、破碎したような鋭い剥片でないことが確認できた。このことからチャート粒子混入土器は、北谷町以北のチャートを産出する地域周辺で焼成されたか、あるいは原料となる土を携えた集団が移動して製作した可能性も考えられる。

次に、今回の調査成果において最大の目玉といえる市来式土器は、口縁部のみの出土であったが、鹿児島県草野貝塚（河口1952）の事例から、その断面形状が「く」の字を呈する点及び、文様が複雑・華麗且つ施文範囲が広いという点で、市来式の新しいタイプに位置付けられる（河口1957・本田1994）。この発見により、市来式土器の分布域がより広範に及ぶことが実証されるとともに、文化的に沖縄・九州間をつなぎ、双方の土器編年の対比が可能となつた。

なお、この市来式土器については発見後、南島の土器とのつながりを模索し、肥厚口縁を理由にカヤウチバンタ式土器の源流をなすものとして考察された時期もあったが（高宮1974）、現在では面縄東洞式との関係が深いという見解に達している（河口1979）。

また、浦添貝塚の土器組成は、いわゆる奄美系土器を主体としていたことから、うるま市隅原遺跡の事例（高宮ほか1976）とともに、南下奄美人のコロニ一形成の可能性を想起させる材料となった（高宮1987）。

次に、石器は総数で19点が得られている。第3ピットで石皿と磨石が近接して出土したほか、小型の敲石が数点出土している。これらの石器は堅果類の粉食加工に用いた可能性が考えられ、食料加工の一端を示している。また、千枚岩を薄く研磨した小型のノミ状石製品も出土している。その他チャート片が19点含まれており、石鏸等の製品加工の可能性を示している。

これらの石材に関しては、県内において産出しない輝緑岩製の敲き石ほか2点が含まれており、市来式土器とともに北方地域からもたらされた可能性が考えられる。今後、本石材の産出地を特定すること

により、移入ルートが割り出せるものと思われる。

貝製品は総数で13点が出土している。その種別は、クロチョウガイ及びヤコウガイ製の殻、イモガイ製の玉及び札状の製品、ウミギクガイ科の貝輪、有孔ホラガイ、スイジガイ製利器等が得られている。

骨製品はイノシシやクジラ、ジュゴンの骨を利用した製品のほか、イノシシ牙及びサメ歯に穿孔した製品が主体をなし、用途は腕輪や垂飾品等の装身具及び、鈸等の実用品とに分けることができる。

自然遺物では貝類が大部分を占めており、その他イノシシや魚類の骨が出土している。これら自然遺物の出土は、第1及び第3～5ピットにかけて岩の間に多く見られるが、これは貝塚が崖に接しているために、その裂け目か落石の隙間に集中して堆積したものと思われる。

貝類は陸産貝が量的に最も多く、ほかに外洋・珊瑚礁域、河口干潟・マングローブ域産の順で得られている。この棲息域の状況及び貝種は、当時の自然環境及び狩猟採集時の行動範囲を如実に物語るものであるが、これらの貝類は、同様な種が現在も当地周辺において採取されることから、部分的視野で見ると、周辺環境は当時からさほど変化していないということができる。この中でシレナシジミについては計測を行い、数遺跡と比較を行った。

動物骨ではイノシシが260点と最も多く、他にネズミ、ジュゴン、鳥類、は虫類、魚類の骨が得られている。イノシシ骨では、乳歯が出土している点及び、四肢骨に見られる骨端癒合の程度から幼獣が多く、小型のイノシシも補食していたことがわかる。なお、この中で骨錐に多用される尺骨の出土は少ない。

魚はハマフエフキ、ハタ類等の岩礁域に棲息する魚類が多く、狩猟時の行動範囲を推測する上で興味深い。

また、出土骨で最大のジュゴン上腕骨については、国立科学博物館所蔵のジュゴン骨格標本と照合し、ジュゴンの成獣左上腕骨であるとする解剖学的分析を行った上で、人類学的観点から、他の検出例や先島及び南洋諸島周辺の民俗事例を参考にした論考が提出されている（北條1976）。

これらの食料残滓の構成から、浦添貝塚人は、遺跡周辺の陸・海・河川すべての環境において採取で

きる動植物を巧みに利用しながら、生活を営んでいたことが窺える。出土貝類の種別からすれば、特に河川（牧港川）への依存度が高い傾向が見られ、周辺の遺跡分布状況からも見えるように、牧港川は長きにわたり、人々の生活の中で重要な位置を占めていたことが理解できる。

以上、これまで概観した浦添貝塚に見られる資料の構成は、近年になり調査事例が増えつつあるが、特にうるま市石川に所在する古我地原貝塚（島袋編1987）の事例は、その立地や周辺環境も含めて符合する要素が多数見受けられることから、両遺跡は同時期に類似する文化を共有していた可能性を考えられる。このような例も考慮し、今後様々な観点から奄美圏をも含めた広範な比較検討を行い、この時期の文化について解明していく必要がある。

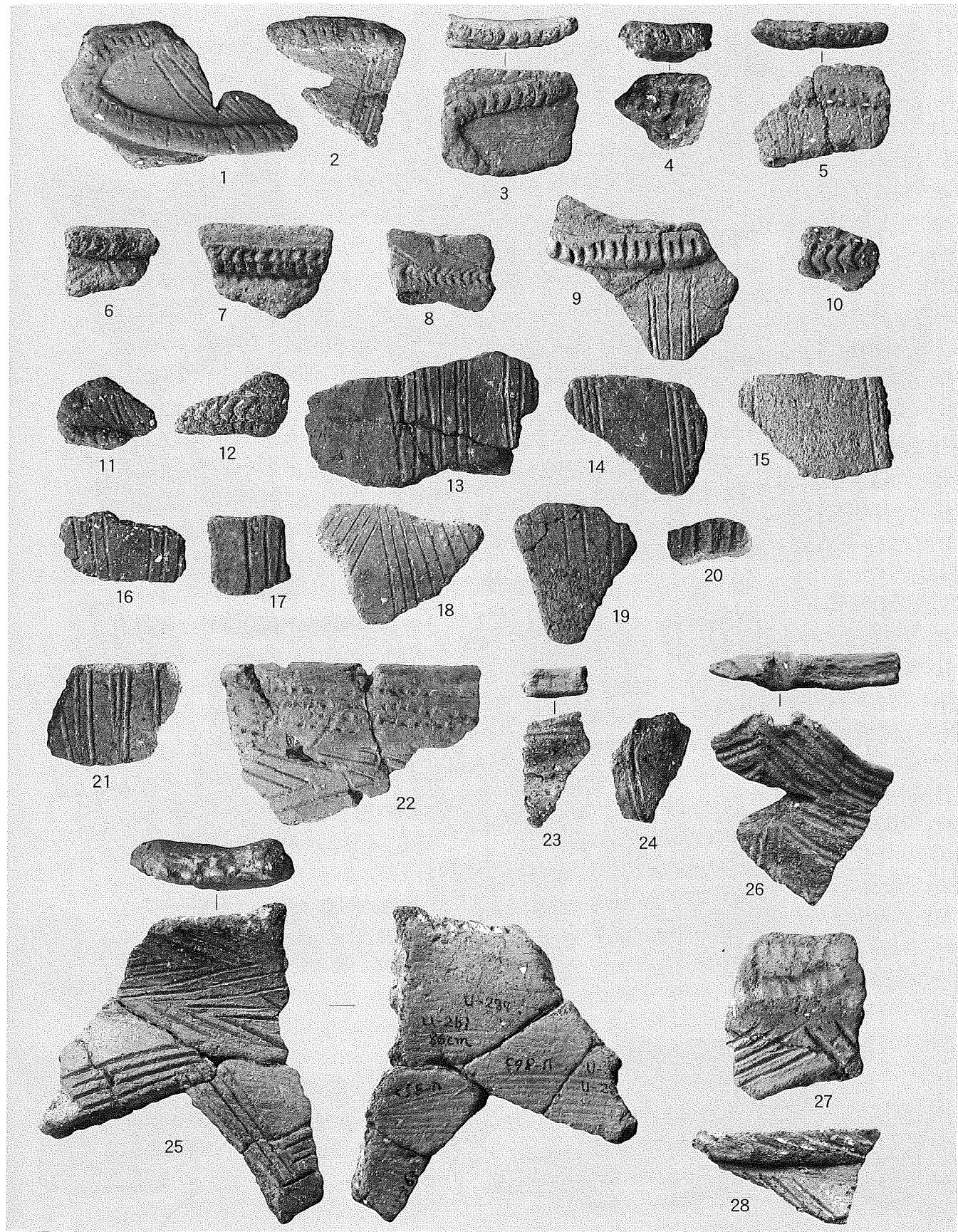
さいごに、浦添貝塚の調査が行われた当時の沖縄は、日本復帰直前の各種運動が盛んな時期で、そのころ行われた発掘調査もそれに共鳴するように、沖縄県（琉球政府）民として、あるいは自己のアイデンティティーを発掘するという意識で調査を行っていたような感がある。

浦添貝塚の調査も例外でなく、調査に携わった浦添高校郷土史研究クラブのメンバーも、そのような風潮の中で、学生なりの哲学をしつつ日々を過ごし、調査に臨んでいたのではないだろうか。浦添貝塚の調査成果は、このような混沌とした時期において、まさにタイムリーといえる結果となった。市来式土器の発見である。この発見は、沖縄考古学の編年作業にあらたな指標を与えるとともに、日本との考古学的つながりを確信させるものとなった。このことは、その数年後に読谷村渡具地東原遺跡で発見された曾畠式土器によりさらに広がりを見せることとなるが、浦添貝塚の調査は、その出発点として記念すべきものとなっている。

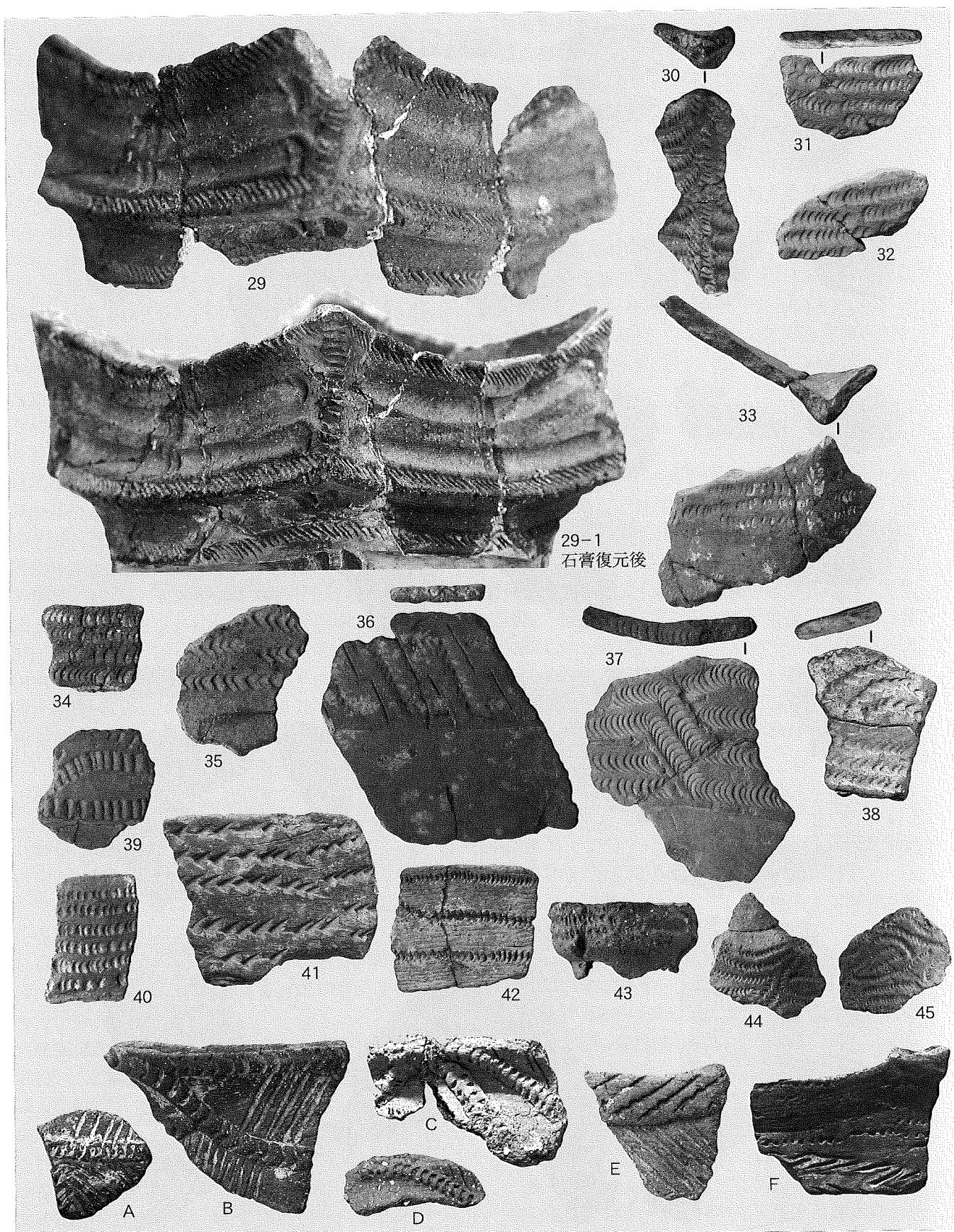
さらには、このような地道な活動が結果的に世論を動かし、遺跡を現地保存するはこびとなり、史跡指定という保護措置を執るまでに至ったことは、最大の成果といえよう。

引用文献

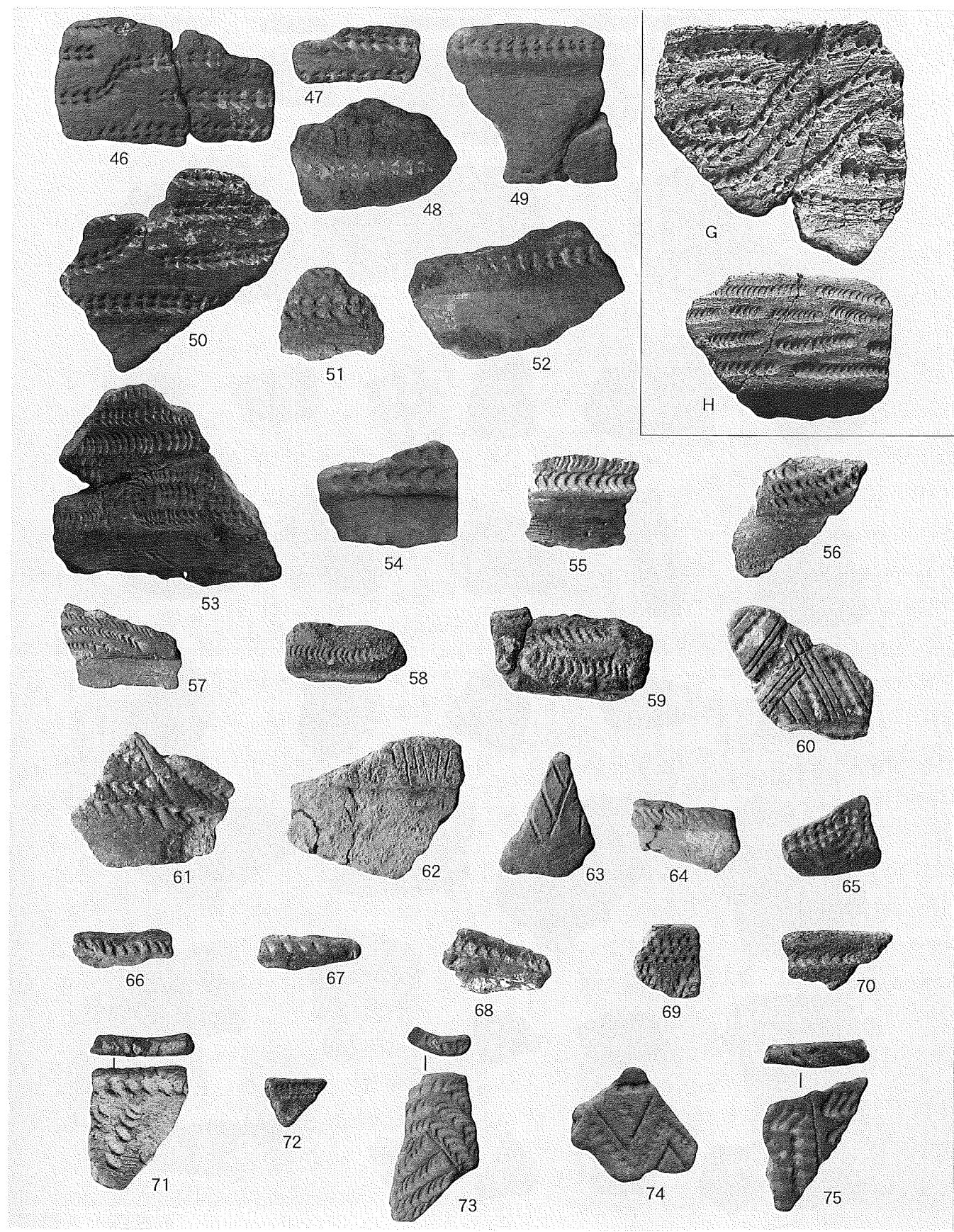
- 河口貞徳. 1952. 「草野貝塚発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要第1号』鹿児島県考古学会
- 河口貞徳. 1957. 「南九州後期の縄文式土器」『考古学雑誌第42巻第2号』日本考古学会
- 国分直一・河口貞徳ほか. 1959. 『奄美大島の先史時代』九学会連合奄美大島共同調査委員会
- 多和田真淳. 1960. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念 補遺(一)」『琉球政府文化財要覧1960年版』琉球政府文化財保護委員会
- 沖縄タイムス社. 1970. 「市来式土器を発見、本土との文化的交流を実証、浦添高郷土研究クが発掘」『沖縄タイムス(7/28)』沖縄タイムス社
- 琉球新報社. 1970. 「浦添貝塚から縄文土器—浦添高郷土研が発見—鹿児島との交流新資料」『琉球新報(7/28)』琉球新報社
- 喜屋武ほか. 1970. 「浦添貝塚」『うらおそい創刊号』浦添高校郷土史研究クラブ
- 新田重清. 1970. 「浦添貝塚発掘調査概報」『南島考古創刊号』沖縄考古学会
- 新田重清. 1971. 「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」『古代文化 第23巻第9・10号』財団法人古代学協会
- 新田重清. 1972. 「浦添貝塚の保存をめぐって①～④」『琉球新報夕刊(3/14～17)』琉球新報社
- 新田重清. 1973a. 「浦添貝塚の保存をめぐって『南島考古だより11・12号』沖縄考古学会
- 新田重清. 1973b. 「特集・1972年の考古学界の動向(7) 南西諸島(沖縄県)」『考古学ジャーナル臨時増刊号No.81』ニューサイエンス社
- 高宮廣衛. 1974. 「いわゆるカヤウチバンタ式土器と宇佐浜式土器について」『沖縄国際大学文学部紀要2-1』沖縄国際大学
- 河口貞徳. 1974. 「嘉徳遺跡—大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査—」『鹿児島考古第10号』鹿児島考古学会
- 高宮廣衛ほか. 1976. 「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古第1号』沖縄国際大学文学部考古学研究室
- 北條暉幸. 1976. 「浦添貝塚出土ジュゴンの上腕骨の同定と解剖学的ならびに人類学的考察」『人類学雑誌 第84巻第2号』日本人類学会
- 金武正紀編・比嘉春美. 1978. 「石製品、土製品」『沖縄県文化財調査報告書第17集 津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 河口貞徳ほか. 1979. 「宇宿貝塚」『鹿児島県笠利町文化財調査報告書』笠利町教育委員会
- 嵩元政秀ほか. 1980. 『仲宗根貝塚—第1・2次発掘調査概報一』沖縄県教育委員会
- 金武正紀ほか. 1980. 『宇検貝塚群・アカジヤンガ貝塚発掘調査報告』具志川市教育委員会
- 上原靜. 1981. 「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古第7号』沖縄考古学会
- 當眞嗣一・上原靜. 1982. 「伊武部貝塚発掘調査について」『南島考古だより25号』沖縄考古学会
- 金武正紀ほか. 1985. 『沖縄県文化財調査報告書第67集シヌグ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告一』沖縄県教育委員会
- 高宮廣衛. 1987. 「うるまの島じま」『地方文化の日本史(1)ー光は西からー』文一総合
- 島袋洋編. 1987. 『沖縄県文化財調査報告書第84集 古我地原貝塚—沖縄自動車道(石川～那霸間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 黒住耐二. 1987. 「遺跡出土貝類の棲息場所類型化の試み」『沖縄県文化財調査報告書第84集 古我地原貝塚—沖縄自動車道(石川～那霸間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 下地安弘ほか. 1988. 『浦添市文化財調査報告書第12集 チヂフチャーダン穴遺跡範囲確認調査報告書』浦添市教育委員会
- 本田道輝. 1994. 「市来式土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣
- 中山清美. 1995. 『笠利町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 用見崎遺跡』笠利町教育委員会
- 金子浩昌. 1996. 「動物遺体」『沖縄県文化財調査報告書第125集 平敷屋トウバル遺跡—ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 島袋春美. 2006. 「貝類遺体」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集新城下原第二遺跡—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌・久貝弥嗣. 2006. 「動物遺体」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集新城下原第二遺跡—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一』沖縄県立埋蔵文化財センター



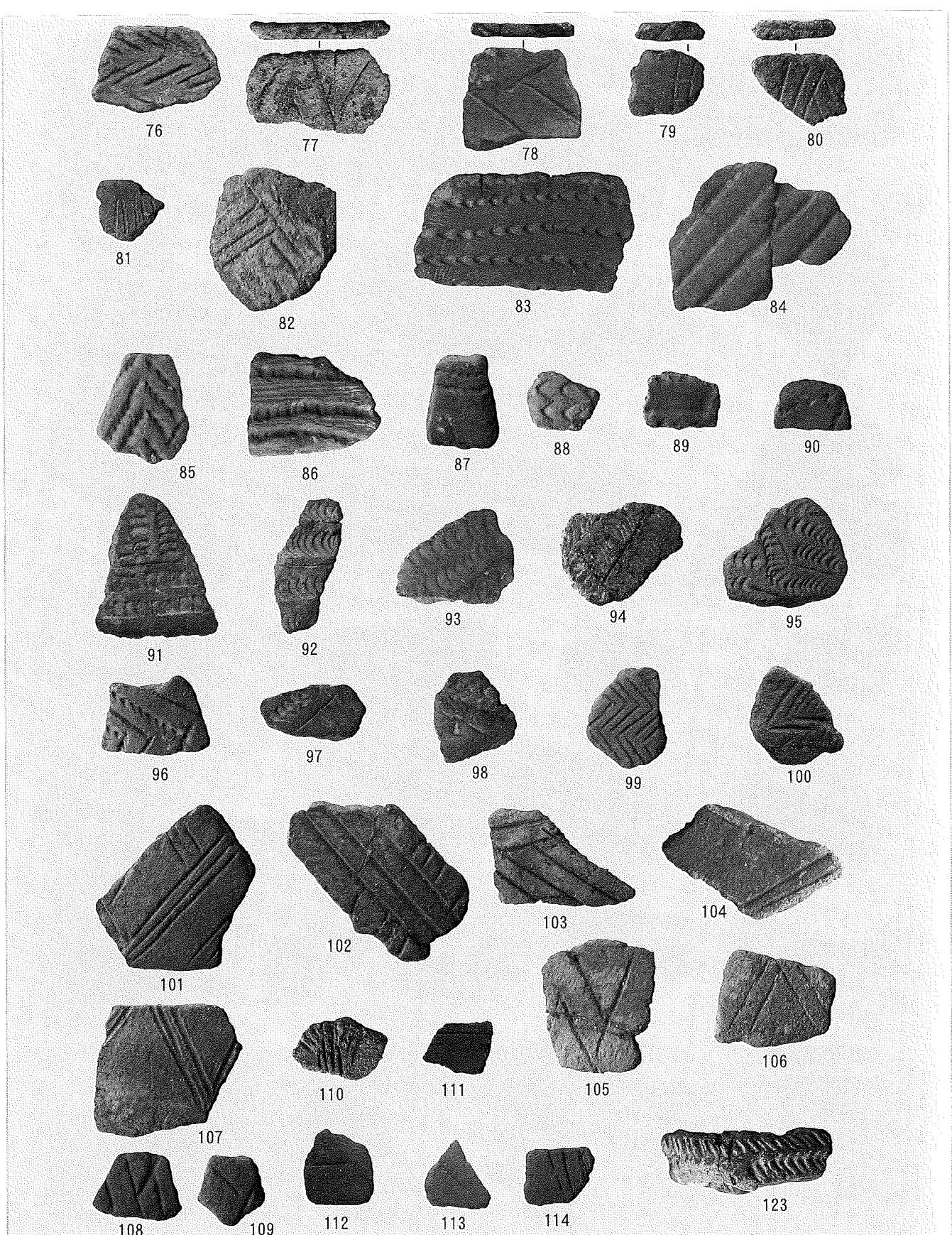
図版1 土器（1）面縄前庭式土器群（1～21）、仲泊式土器群（22～28）



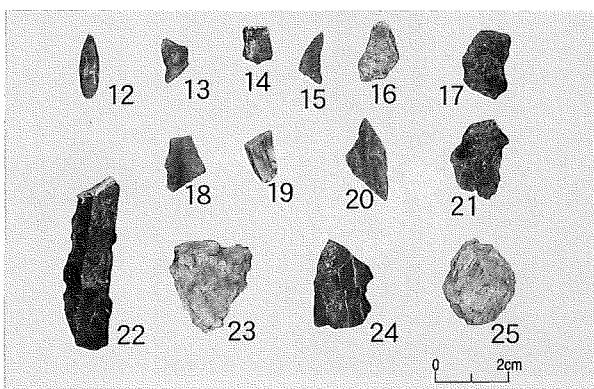
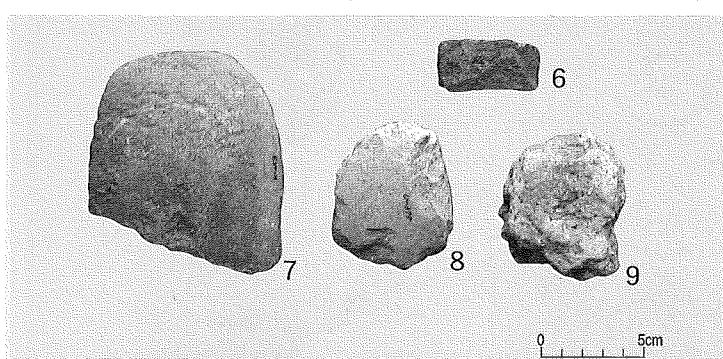
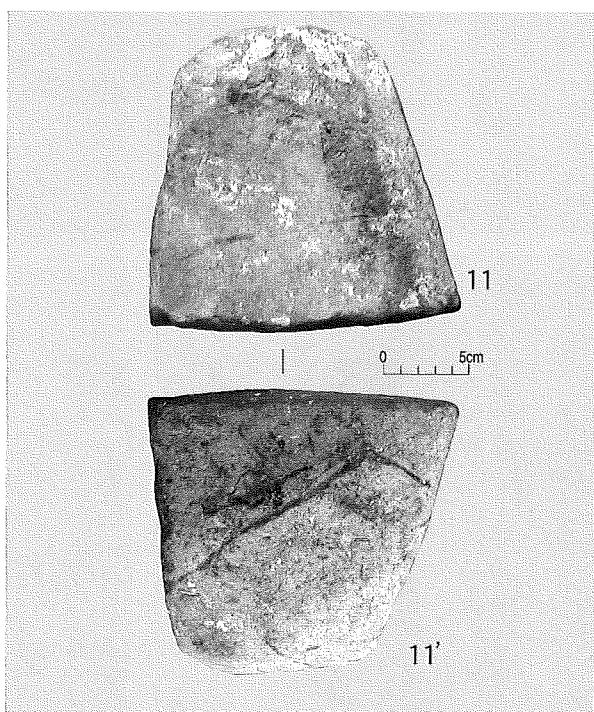
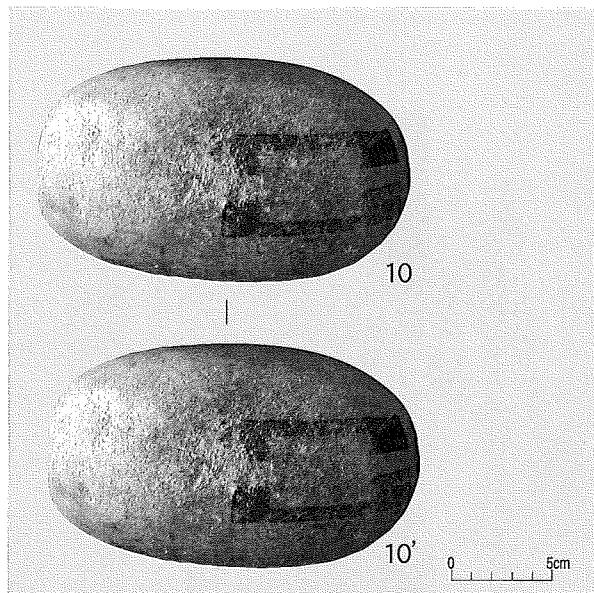
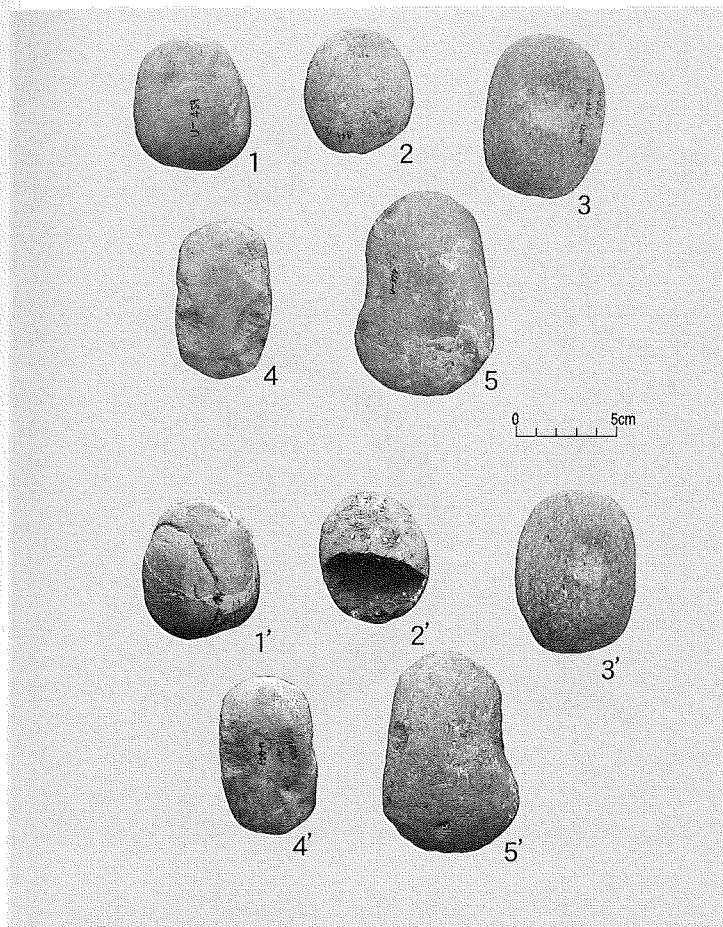
図版2 土器(2) 市来式土器(29)、宇宿下層式土器群(30~45)、面繩前庭式土器群(A~D)、仲泊式土器群(E・F)



図版3 土器(3) 宇宿下層式土器群(46~75, G・H)

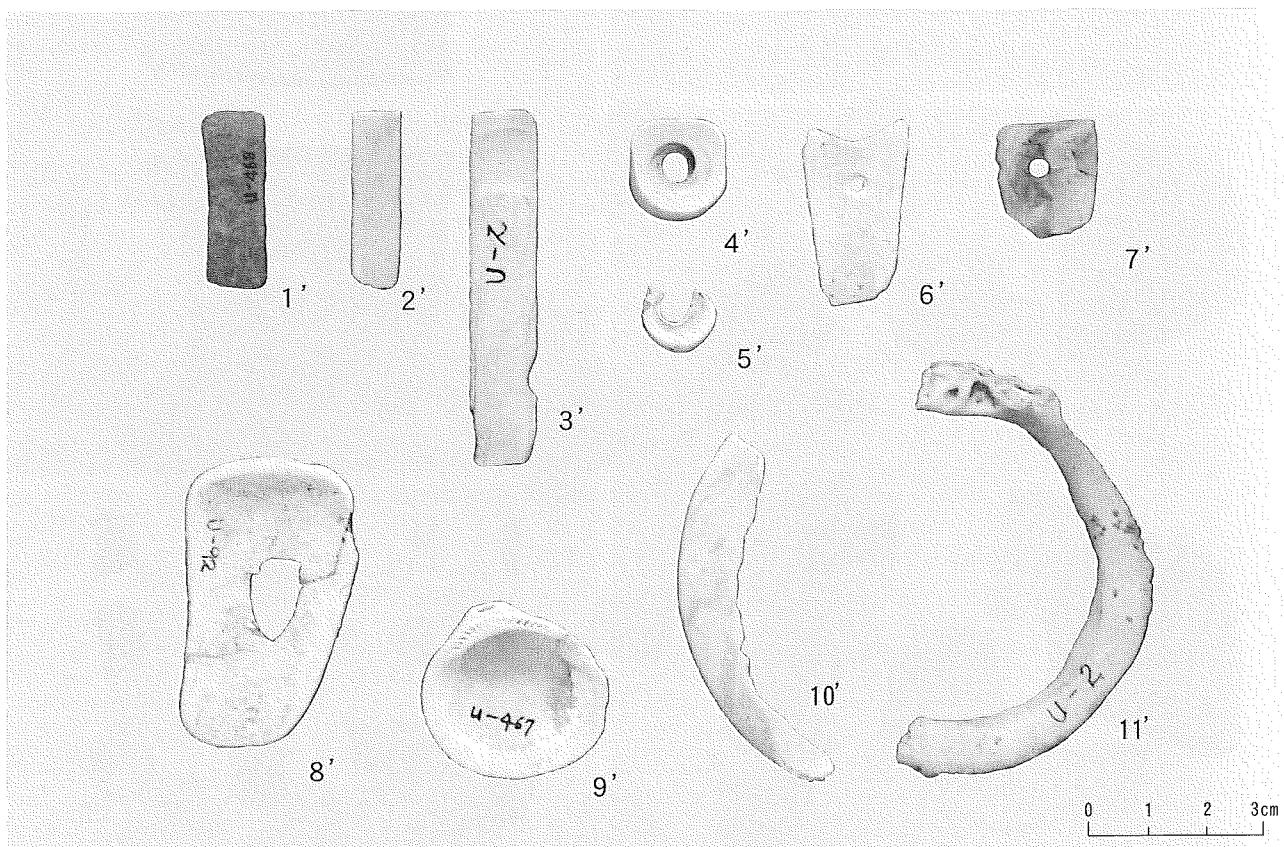
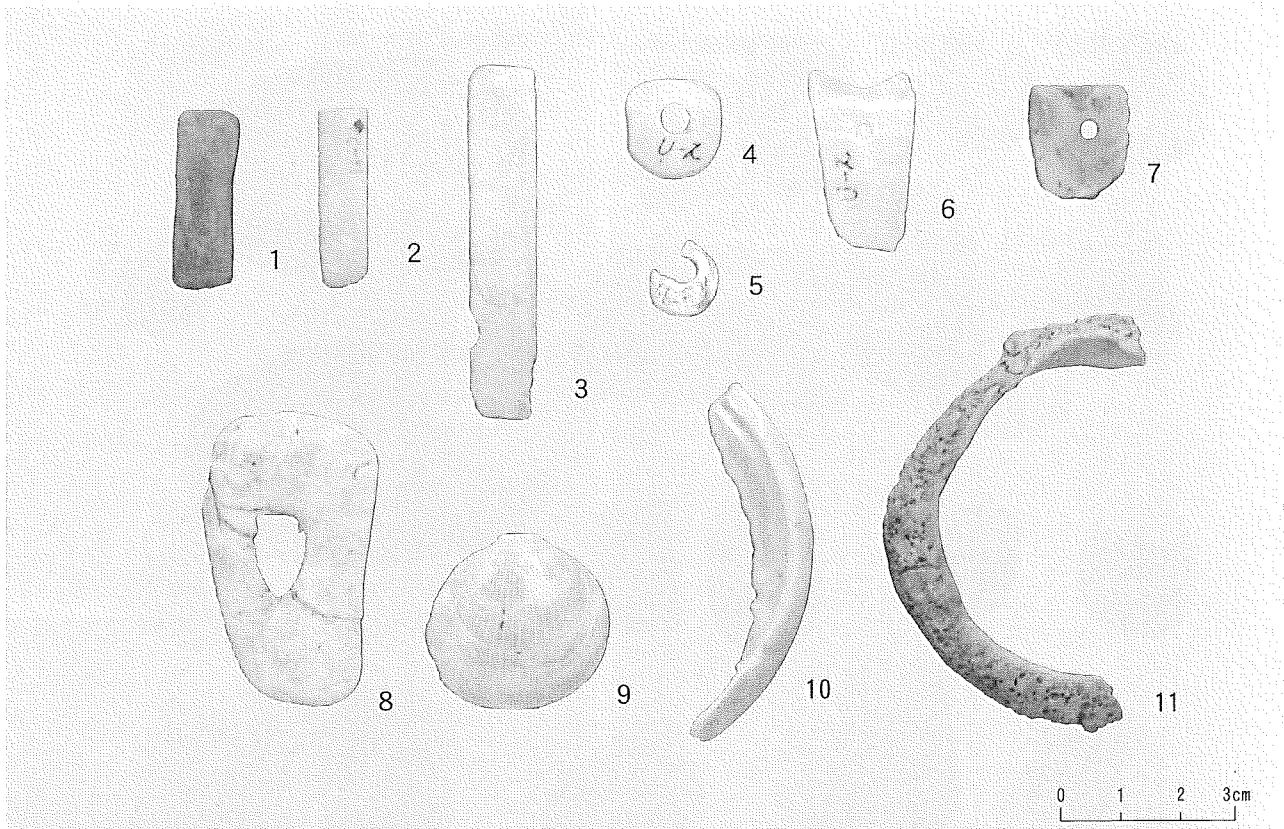


図版4 土器(4) 宇宿下層式土器群(76~123)



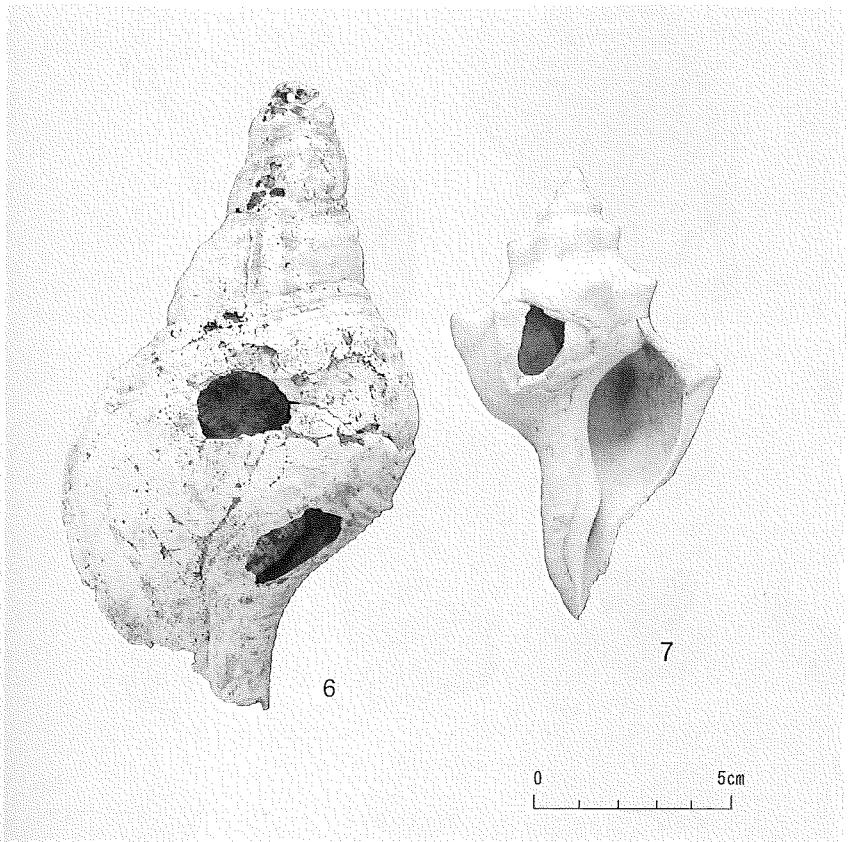
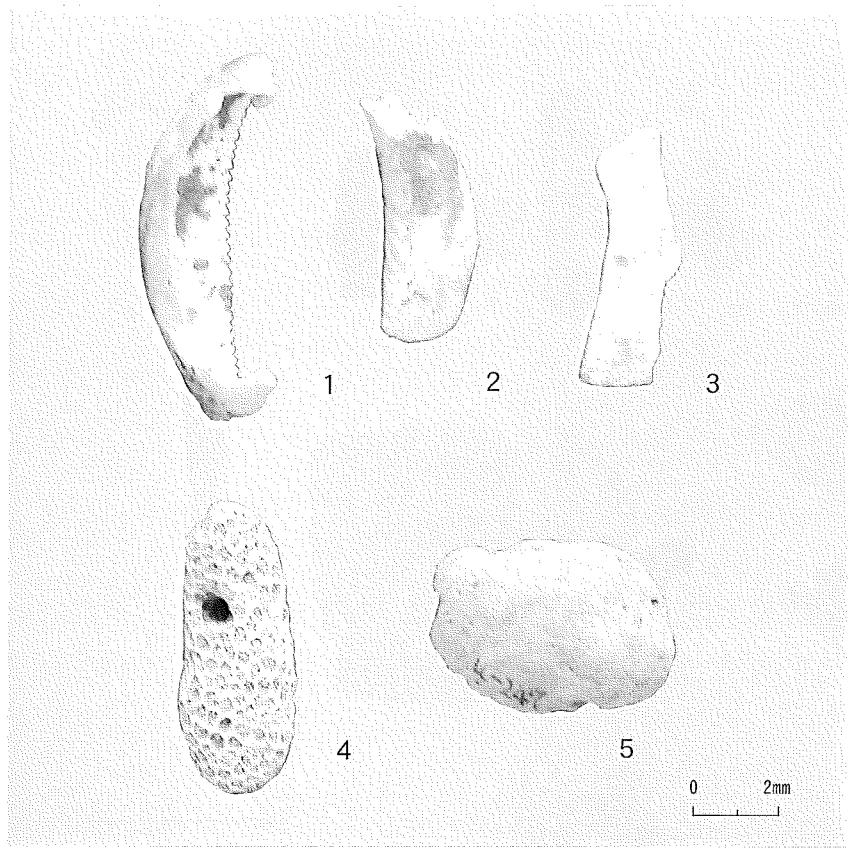
図版5 石器類

敲打器類(1~5・7~9)、打製石器(6)、磨石(10)、石皿(11)、チャート(12~25)



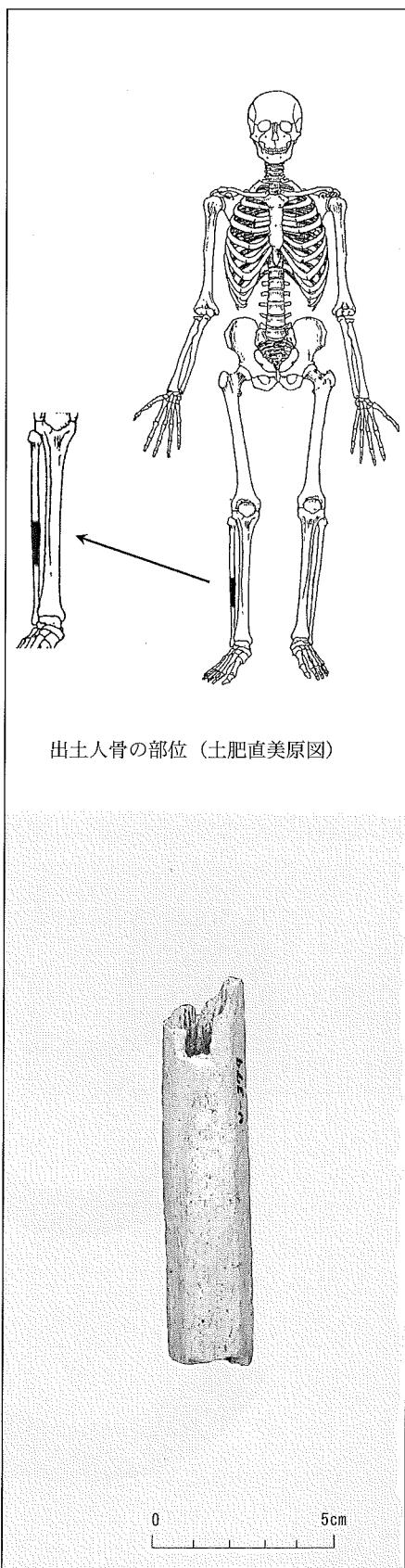
図版6 石・貝製品（1）

1：石製品（ノミ状製品）、2・3：札状製品、4・5：貝玉、6・7：貝鏃、8：カバミナシ、
9：ソメワケグリ有孔、10：サラサバティラ貝輪、11：メンガイ類貝輪

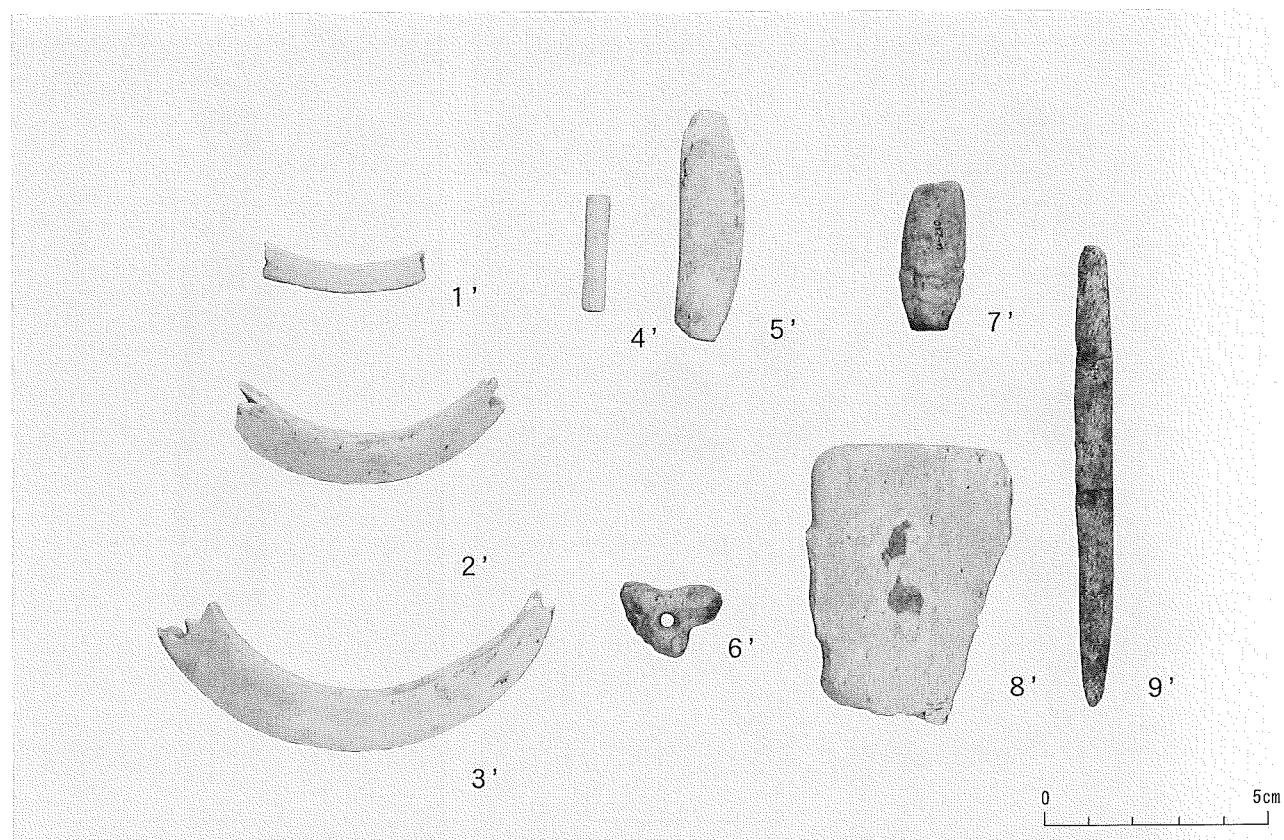
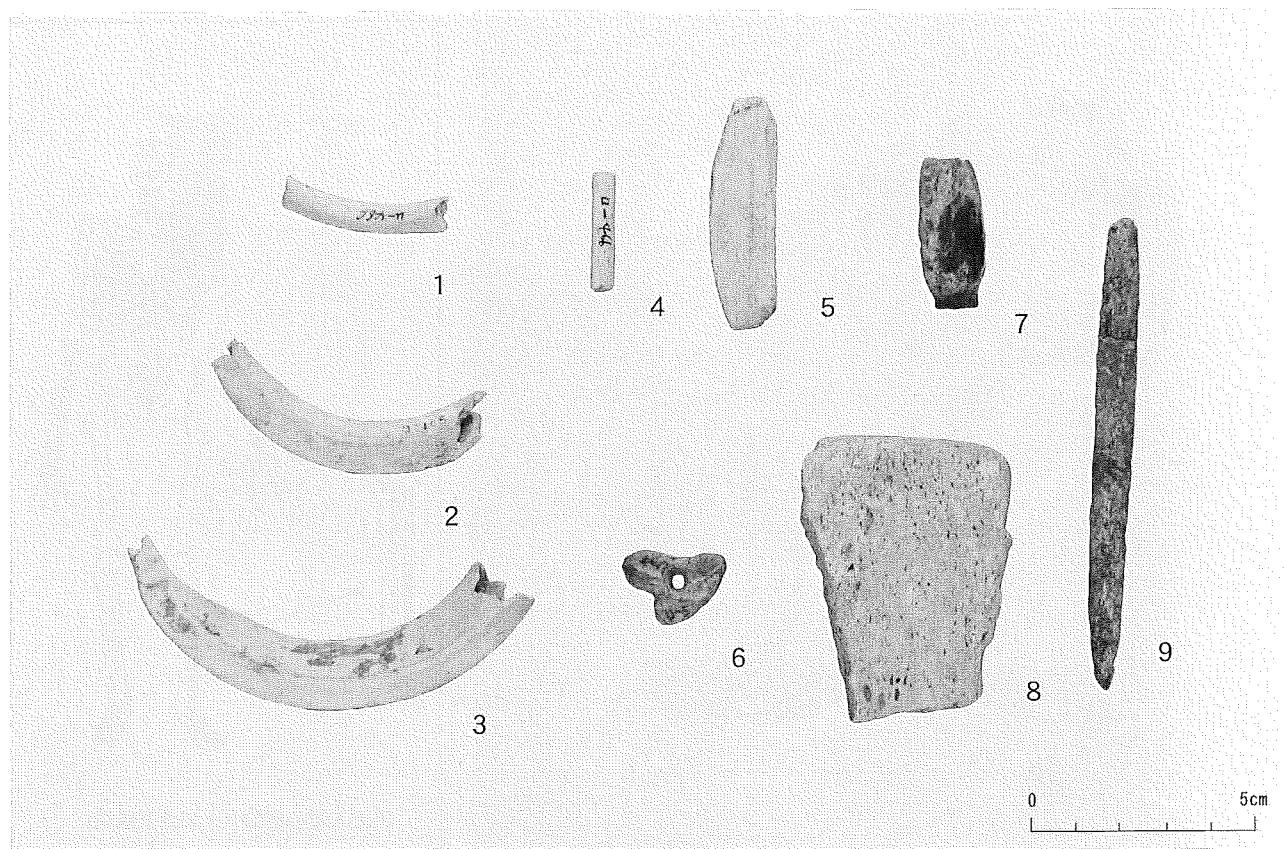


図版7 a 石・貝製品(2)

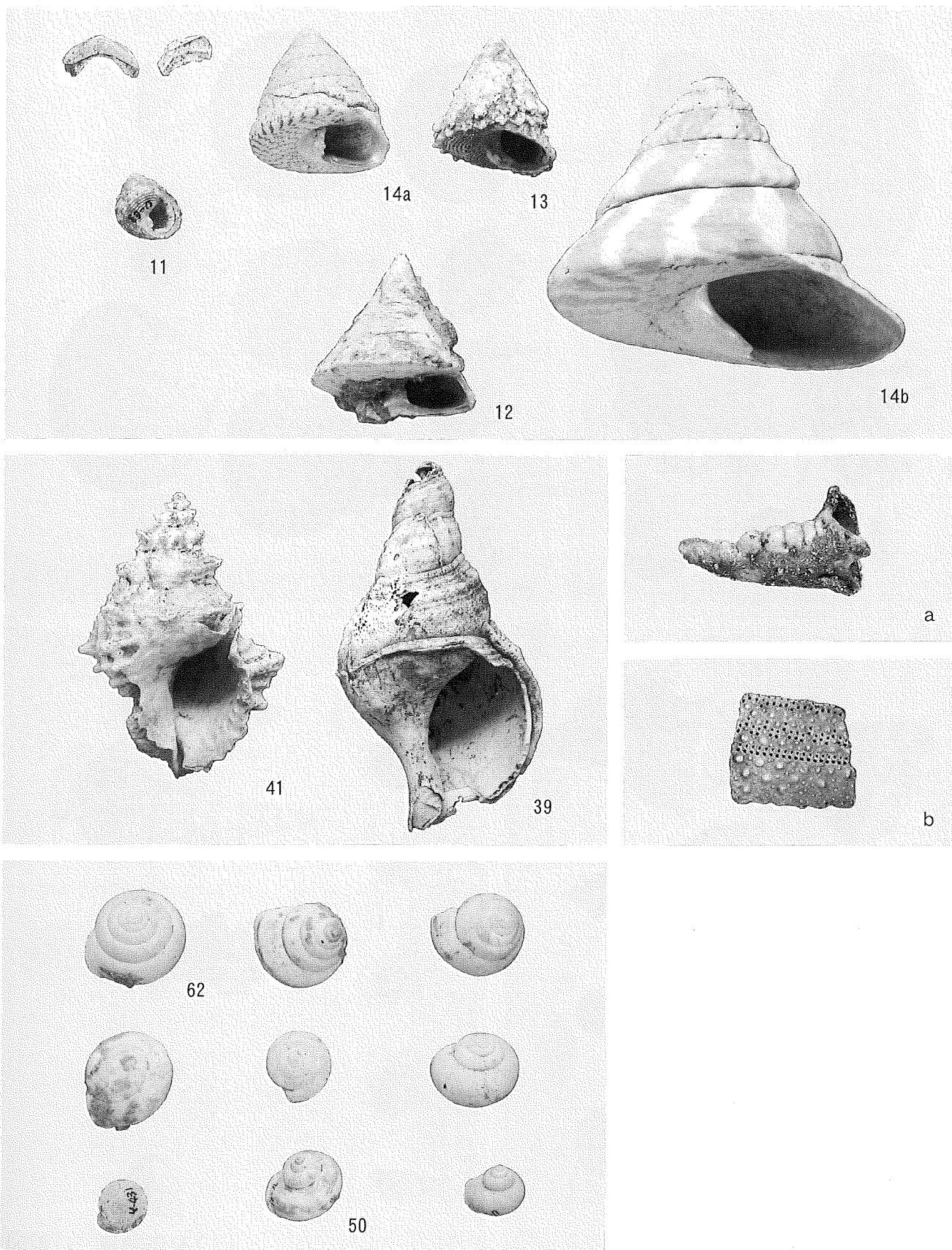
1 : ヤクシマダカラ有孔、2 : スイジガイ利器、3 : ヤコウガイ自然、4・5 : サンゴ有孔、
6 : ホラガイ有孔、7 : イトマキボラ有孔



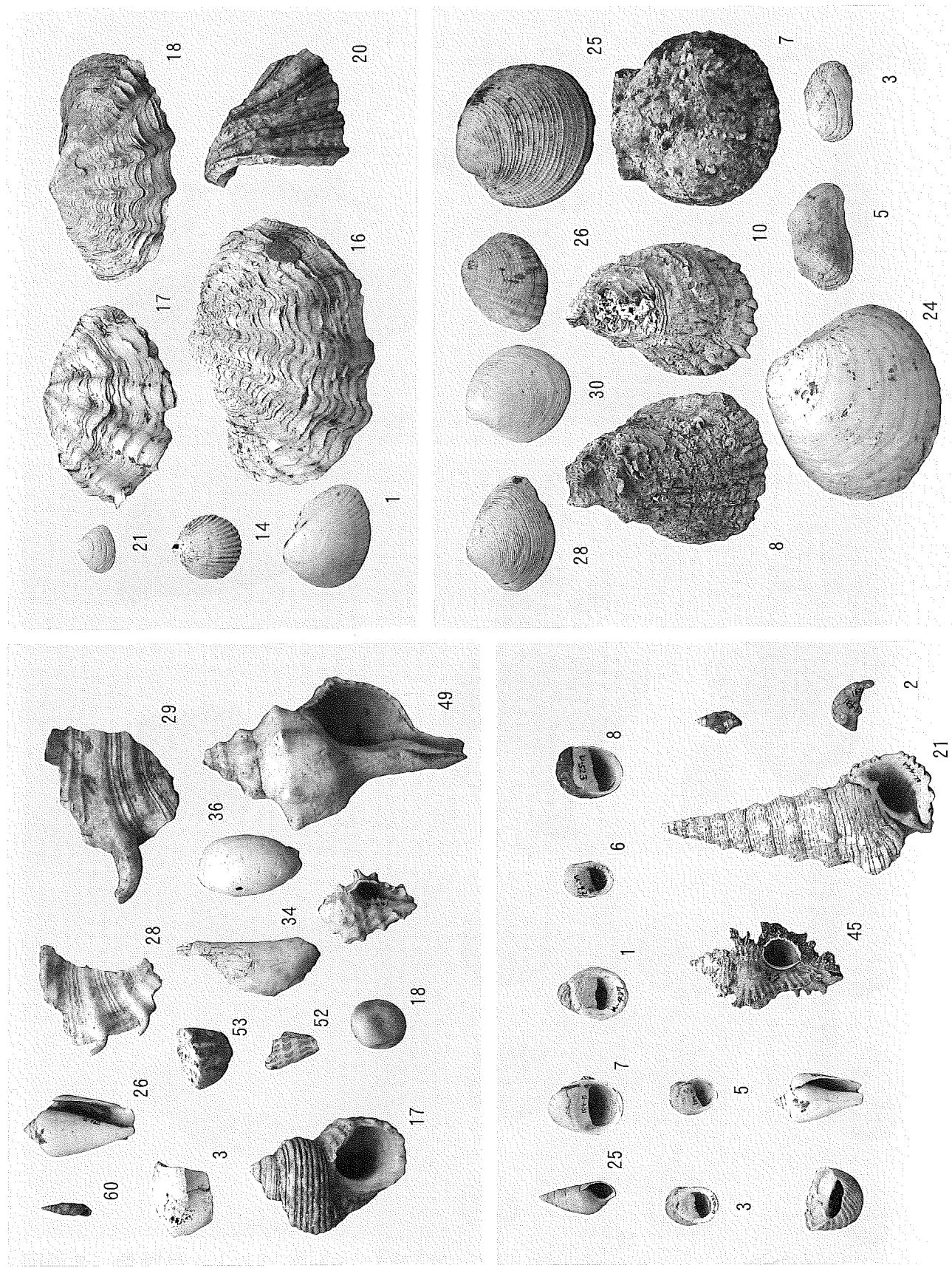
図版7 b 人骨



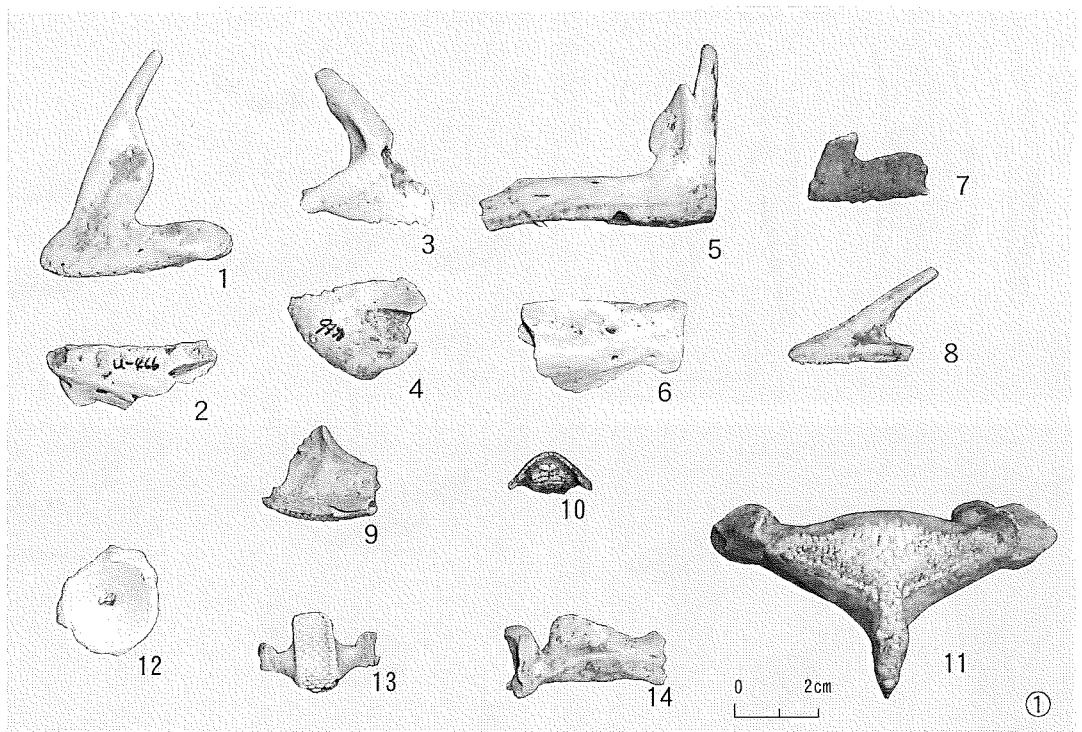
図版8 骨製品 1～3：イノシシ下顎犬歯（オス）、4：イノシシ腓骨、5：イノシシ四肢骨、
6：サメ歯有孔、7～9海獣骨



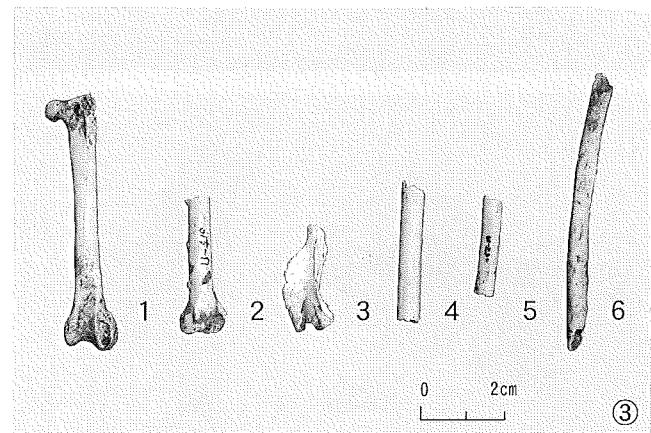
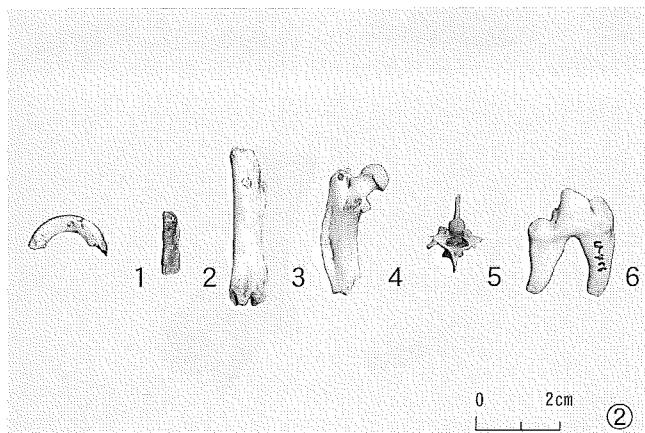
図版9 貝類 (番号は第6・7表の集計表と一致)・動物遺体 (a:カニ、b:ウニ甲羅)



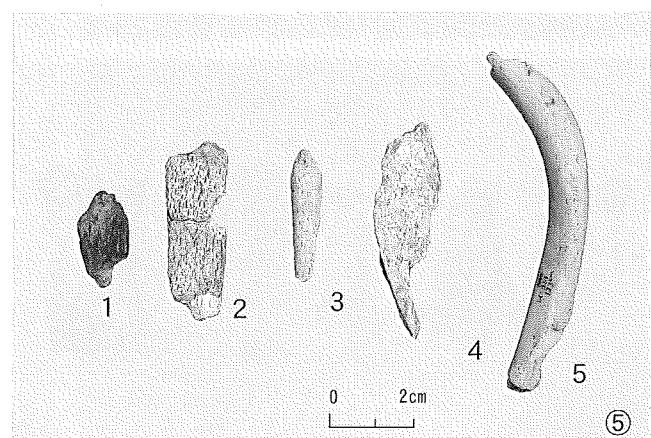
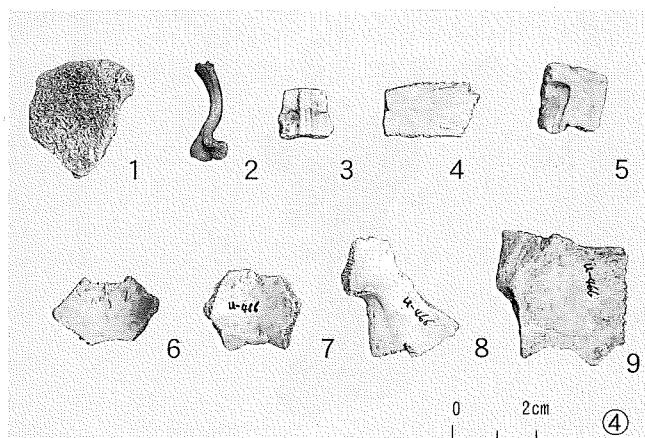
図版10 貝類遺体 (番号は第6・7表の集計表と一致)



①



②

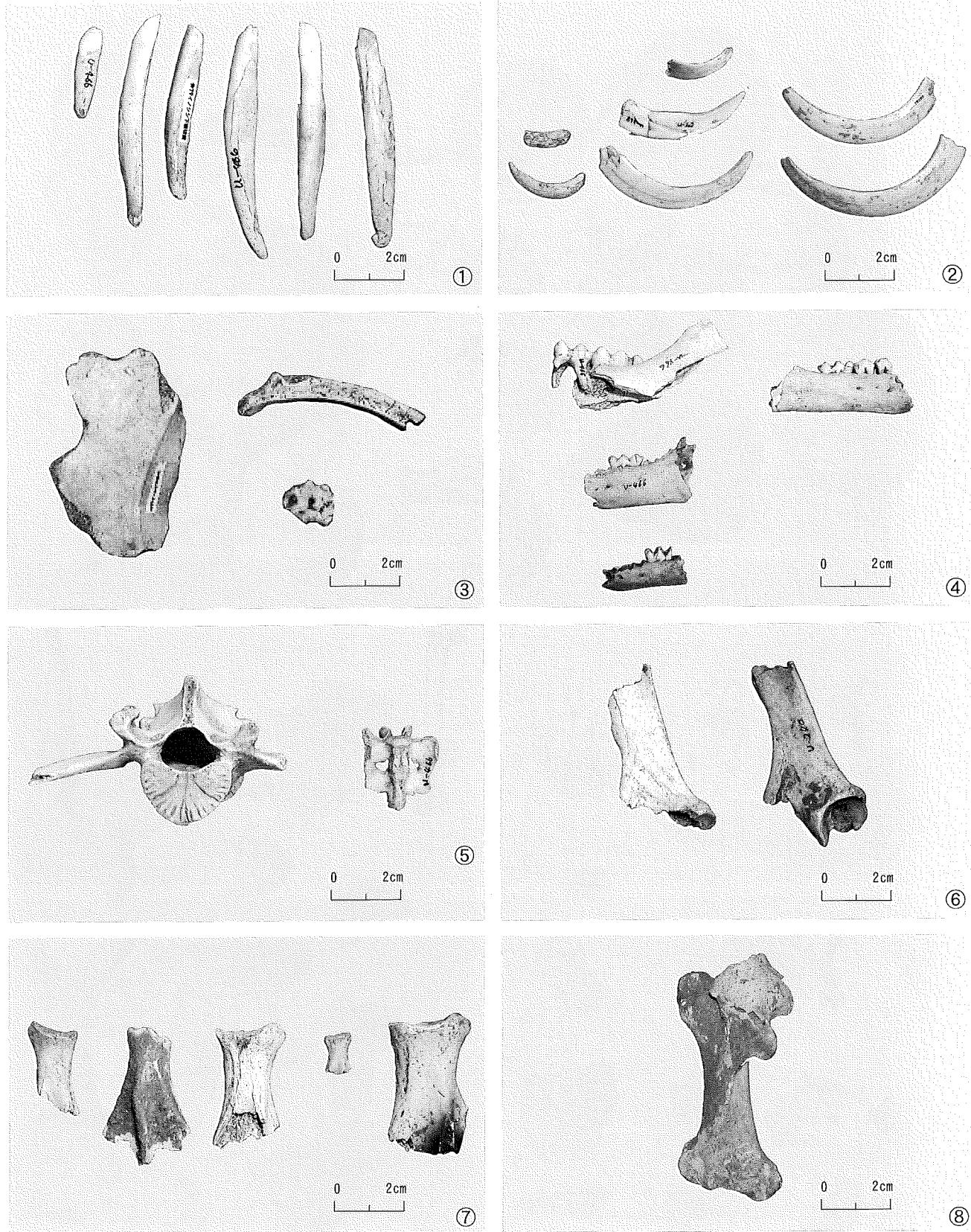


④

⑤

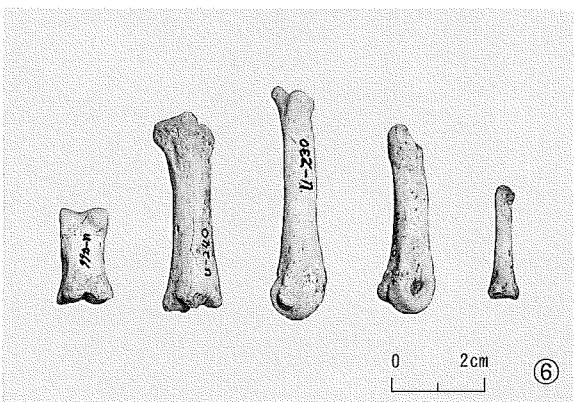
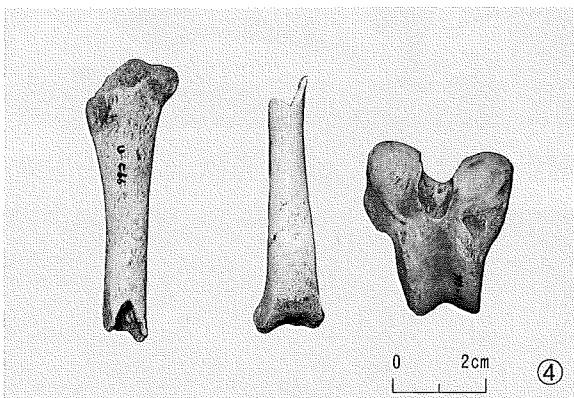
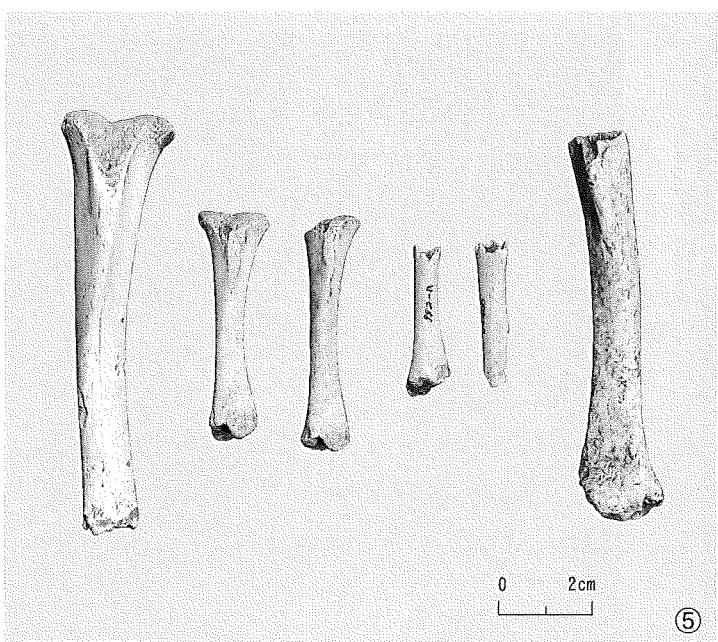
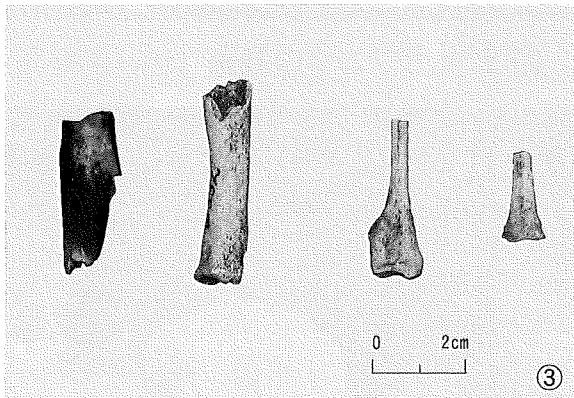
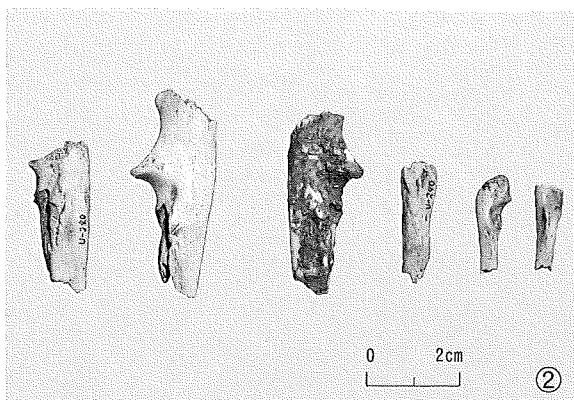
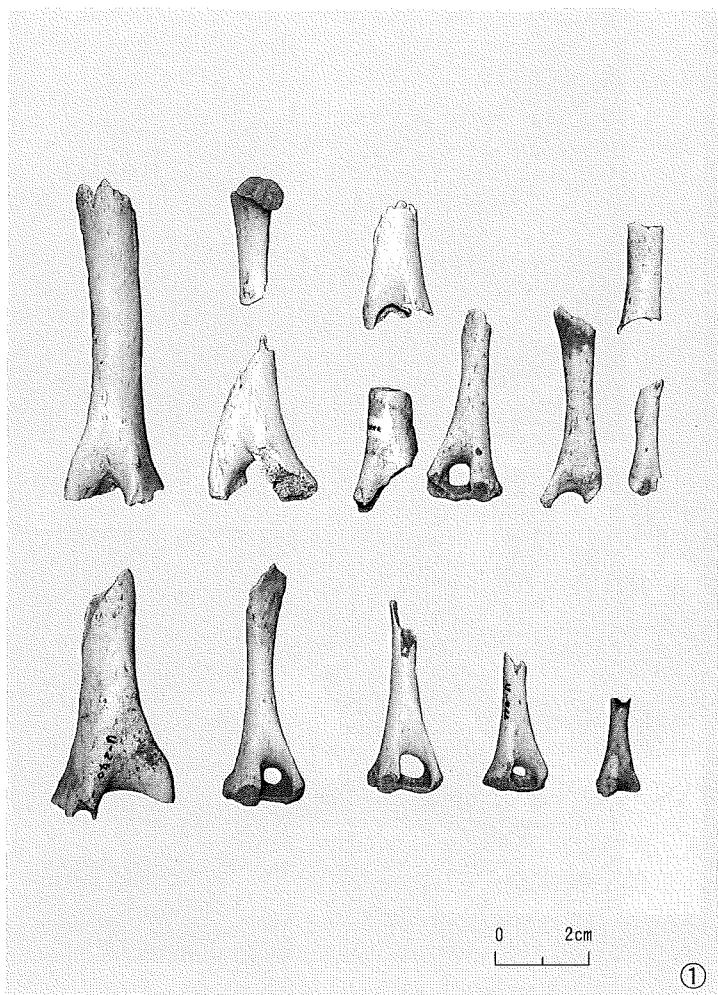
図版11 動物遺体(1)

①サカナ類、②ネズミ・ヘビ・イヌ、③トリ、④ウミガメ・リクガメ、⑤ジュゴン・クジラ



図版12 動物遺体(2)

イノシシ：①下顎切歯、②下顎犬歯、③頭骨・助骨・耳骨、④下顎骨、⑤椎体・尾椎、⑥寛骨、⑦肩甲骨
ジュゴン：⑧左上腕骨

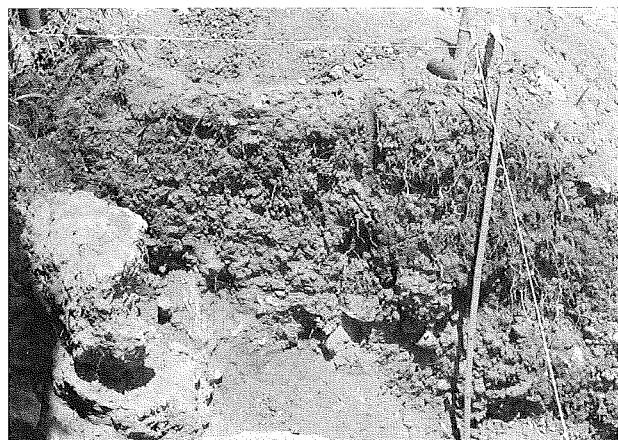


図版13 動物遺体(3)

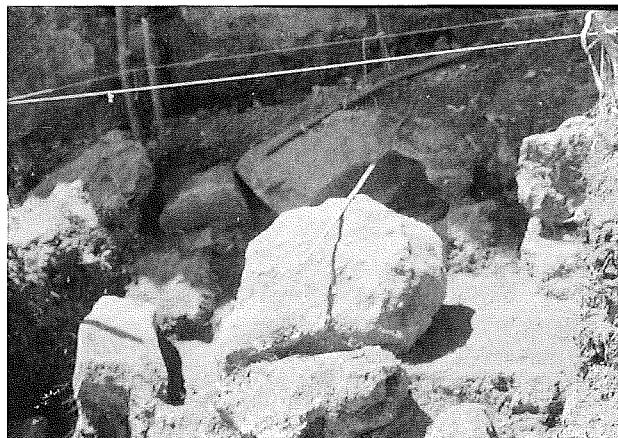
イノシシ：①上腕骨、②尺骨、③橈骨・腓骨、④大腿骨、⑤脛骨、⑥指骨・中手（足）骨



図版14 カワニナの凝集（1971年撮影）



図版15 第1・1'ピット東壁土層堆積状況（第一次調査）



図版16 第1・2ピット検査状況（第一次調査）



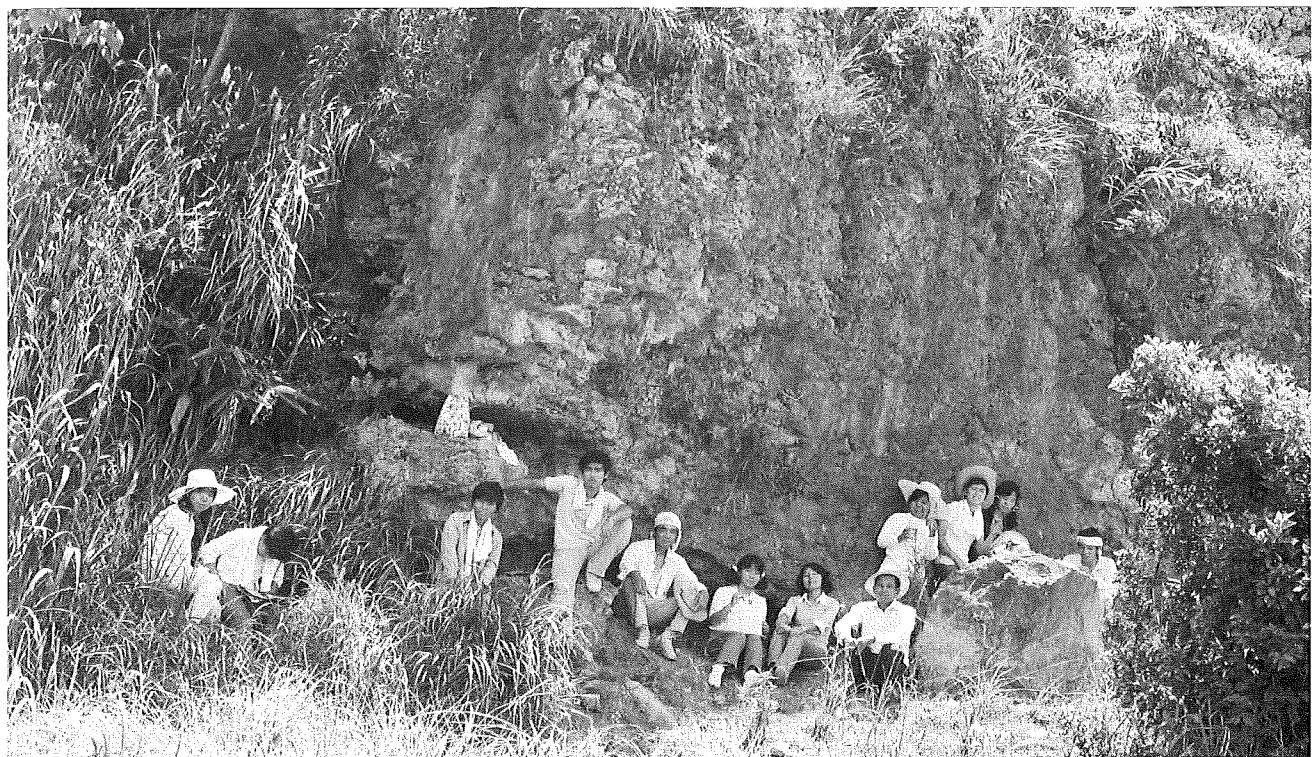
図版17 調査状況（第一次調査）



図版18 調査状況（第二次調査）



図版19 調査状況（第二次調査）



図版20 浦添高校郷土史研究クラブのメンバー（浦添貝塚補足調査・1971年撮影）

左から 栗森菊枝、識名久美子、比嘉春美、宮城朝光、古波藏一成、比嘉サヨ子、与座清子、新田重清先生、砂辺節子、外間恵美子、1人おいて棚原正助



図版21 伊祖公民館を使用した合宿の状況（第二次調査・1970年撮影）

左から 喜屋武元伸、津波古聰、新田敦、棚原正助、大嶺政子、新田尚、潮平寛一



図版22 トンネル工法により保存された浦添貝塚（写真右上・1973年撮影）



図版23 工事中の国道330号線（浦添貝塚から東を望む・1973年撮影）